

「動乱の時代」の幕開け ——太平天国前夜の広西における 下層移民と天地会系結社の活動——

菊池秀明

はじめに

中国近代史において太平天国運動（1850–64 年）が与えた衝撃の大きさを否定する人はいないであろう。だが中国近代史研究が現代中国の政治変動に翻弄されたこともあって、太平天国の実像とその後世に与えた影響については未解明の部分が少なくない¹⁾。とくに太平天国を生んだ社会背景が具体的にいかなるもので、運動が近代の中国社会にどのような特質を付与したかという点については、検討の余地が大いにあると考えられる。

かつて筆者は太平天国の発祥地となった広西社会の特徴について、フィールドワークで収集した族譜史料（日本の家系図に相当）を手がかりに移住と民族関係に焦点をあてて考察を進めた。その結果開発の主体となった漢族の有力移民は多くの科挙エリートを生んで地域社会のリーダーシップを独占したこと、彼らは非エリートである少数民族や客家などの漢族下層移民を支配し、両者の対立が深刻であったことを明らかにした²⁾。

また前稿では近年公開が進んでいる檔案史料（清朝政府の行政文書）を活用し、19 世紀前半の広西における社会変容について考察した。そして当時広西の地方官は既存の統治体制を維持することに追われ、新興勢力の成長を促したり、彼らに一定の政治的役割を与えて地方統治を補完させるだけの余力を持っていなかったこと、それは長官たちの更迭劇によって失われた人々の政府に対する信頼を回復できなかったばかりか、科挙エリートと非エリート間の亀裂を深める結果をもたらしたことを指摘した³⁾。

本稿はこれらの成果を踏まえて、太平天国前夜の広西における社会動乱について考察を加える。とくに 19 世紀の華南各省で急速に勢力を伸ばした天地会系秘密結社について、その広西進出の過程と下層移民の関係を明らかにする。また天地会に対する弾圧が進む中で勢力を伸ばした武装勢力（盗匪あるいは土匪）の動向に注目し、その活動がエスカレートしていった理由を解明することにしたい。

これまで太平天国前夜の社会動乱に関する研究は、多くが実録や地方志などの二次史料をベースに進められてきた⁴⁾。その 1 つの理由は檔案史料が台湾、大陸に分かれて所蔵され、系統的な整理、分析が難しいという事情にあった。そこで本稿は台湾の故宫博物院で収集した宮中檔案、軍機処檔案を整理し、これを北京の中国第一歴史檔案館に所蔵されている軍機処奏摺録副（農民運動類）と組み合わせて分析する。また既刊の史料集⁵⁾を併せて活用することで、史料的にトータルな研究が可能になると考えられる。

むろん檔案史料は多くが地方官の行政報告であり、みずからの失点を避けるためにその内容は全て真実を語っているとは限らない。だがそれは同時代の証言として貴重であり、少なくとも当時の清朝当局が事態をどのように認識していたかを教えてくれる。さらに檔案史料が最も有用なのはいくつかの重大事件について、他史料の追従を許さない詳細な記録を残した点にある。本稿はこれら檔案史料の持つ特徴を活かしながら、19世紀前半の広西で進んでいた「動乱の時代」の前奏曲を出来る限り詳細に描き出すことにしたい。

1. 18-19世紀の広西における下層移民の活動とその特徴

前稿で指摘したように19世紀の広西はすでに開発のピークが過ぎ、西部の少数民族地区に対する開墾が進んでいた。それでは当時広西に入植した移民はいかなる特徴を帯びていたのであろうか。道光8年(1828)に広西巡撫の蘇成額は次のように報告している。

広西は辺境にあつて面積も広く、荒れ山や野原が至るところに残っている。広東、湖南と境を接しているため、常に外来の客民が小作しようとやってくる。土地所有者は自分の田畑を耕すのに忙しく、小作料を取れば良いと考えて、その者が良民かどうか確かめずに小作させてしまう。ひどい場合には里保(村役人)が官の土地を勝手に小作させて利益を得ることもある。

小作する者には善良な者が多いが、なかには無頼の徒が小作に名を借りて、匪賊を匿ったり事件を起こすことがある。前任の巡撫と私は状況をふまえて規則を作り、各地方官に取り締まらせた。おとなしい者は引き続き耕作させ、匪賊はすぐに捕らえた。また保甲を厳密に実行し、事件があれば必ず処罰した。

近年来、会匪(天地会をさす)や盜賊に関する事件で捕らえた犯人は五百名を超えるが、その多くは外来の遊匪で、すでに取り調べのうえ処罰した。現在会匪と盜賊の活動は以前に比べて少なくなり、地方は安静であるが、これらの游民はひそかに行動し、棲み家も一定しない。また彼らが小作する場所は多くが深い山奥であり、少しでも取り締まりを怠ると必ず問題が発生する……。

そこで私は命令を受けた後、再び規則を定め、各地方官に山を耕す客民を細かく調査させた。来歴が不明で疑わしき者を故郷へ帰して監督させると共に、その他は家族の人数、名前、年齢と本籍地を詳細に記録し、誠実な人間を客長に任命して、人々を統率させた。また全ての者を保甲へ編入し、地方官に随時監督させて、騒ぎを起こさせないようにした。もし小作を辞めて帰郷する者がいれば、住んでいた小屋を壊して、匪賊の隠れ家とならないようにした。

さらに私は布告を出し、「今後外来の客民が山地を小作する場合は、土地所有者が必ず良く調査して、善良な者だけに小作をさせよ。もし不明のまま小作させ、将来その者が罪を犯した場合は、本人は無論のこと、土地所有者も“匪賊を匿った罪”によって処

罰する。皆これを知って責任を持ち、みだりに小作人を雇うな」と命じた。⁶⁾

ここからは移民の多くが広東、湖南からの下層民で、土地所有者から耕地を借り受けて小作人となるケースが多かったこと、彼らの入植先は往々にして「深い山奥」であり、地方政府は「来歴が不明」「棲み家も一定しない」即ち実態の把握が難しい彼らの存在を問題視していたことがわかる。これらの内容は太平天国運動の発祥地となった桂平県一帯の「土地の多くは富豪のもので、農民の大半はその佃戸」⁷⁾という情況と良く符合する。

むろん檔案史料に登場する移民の中には、嘉慶年間に桂林で棕箱作りの職人となった文得貴（湖南東安県人）⁸⁾、昭平県で「挑売雑貨」の小商売をした張二（湖南祁陽県人）⁹⁾、僧侶姿で家族を連れて乞食をし、興安県で捕らえられた張士興（湖南新化県人）¹⁰⁾、道光年間に永福県で布店や漆売りを営んだ胡誠昌（江西人）、李士頰（湖南人）¹¹⁾など、農業以外の職業に従事した例も見られる。だが商業活動に必要な元手を持たず、平地で耕地を獲得できなかった移民の多くは、李秀成（太平天国忠王、藤県大黎郷人）が「山を耕し、人に雇われて飯にありついた」¹²⁾と証言したように山肌を開墾したり、桂皮取り（桂平県紫荊山）、藍の栽培（平南県鵬化山）、炭焼き（桂平県鵬隘山）や鉞山労働（貴県龍山、南丹土州）などの雑多な労働に従事したと考えられる¹³⁾。

こうした下層移民の活動は、当時の西南中国で共通して見られた現象であった。例えば道光2年(1822)に雲南の開化、広南府では「湖広、四川、貴州苗疆一帯の流民が、嘉慶十年(1805)いらい毎日数十人、或いは百余人と群をなしてやって来て、夷人（少数民族）の山地を借り、耕して生活している……。その数はすでに数万人を下らない」¹⁴⁾と言われた。また道光6年(1826)に貴州で行われた調査によると、貴陽など8府の少数民族地区に入植し、ミャオ族の耕地を小作する漢族移民は59,623人に上ったという¹⁵⁾。

さて蘇成額の上奏において特徴的なのは、当時の下層移民が「会匪や盗賊」すなわち反社会的な人々の活動と密接に関わり、その隠れ蓑になるとの認識であった。地方官が治安維持の観点から移民に警戒の眼差しを向けるのは珍しいことではなく、すでに筆者は明代末期の広東、広西省境地帯に入植した客家（客家語を話す漢族）移民が「本業につとめない」「游手好閑の徒」と見なされ、弾圧を受けた事実を指摘した¹⁶⁾。また清代の広西は「雲貴両広烟瘴充軍」即ち重大犯罪で裁かれた犯人の流刑先であり、地方政府は増加する流刑者の管理に頭を痛めていた¹⁷⁾。先に紹介した文得貴、張二も役所における銀の窃盗や恋人の夫を毒殺した罪によって処罰された人々であり¹⁸⁾、こうした現実が移民を社会に混乱をもたらす元凶とみなし、その存在を警戒する論理を助長したと見られる。

だがここで興味深いのは犯人に関する調書の中に、かえって移民の実態を示す記録が含まれている点である。以下では桂林と来賓県で発生した2つの事件を検討したい。

【ケース1】桂林における客家移民謝仕朋の連続窃盗事件（乾隆42年・1777年）¹⁹⁾：謝仕朋は広東鎮平県の客家で、従兄弟の謝仕華、黃喜虞らと扇骨作りをしていた。彼らは乾隆

38年(1773)に仕事を求めて広西へ移住し、桂林の扇店に勤めて毎月工賃400文を得た。2年後に謝仕朋らは積み立てた工賃と窃盗、繭売りによって得た金を元手として桂林城内に家を借り、酒屋を開いた。だが酒屋は儲からなかったため、半年後に彼らは店をたたみ、香料を売って生計を立てた。

乾隆41年(1776)に黃喜虞の弟である黃老二が桂林へ至り、翌年には黃喜虞の父親である黃雲孟も鎮平県から移ってきた。この間に彼らが働いた窃盗は全部で14件、被害総額は銀1,743両、錢122,800文におよび、広西按察使、広西学政、桂林府知府、右江道、駅塩道の衙門や寓所が次々と襲われた。謝仕朋ら4人はこれらの金を使って各々妻を娶ったが、罪が発覚するのを恐れて銀500両を同郷の商人である鄧岷先の家に預けた。また彼らは7月に故郷へ帰ろうとしたところを捕らえられた。

なお逮捕された黃雲孟には右腕に「黃大人黃」なる入れ墨があり、それが何を意味するかが問題になった。取調べの結果、黃喜虞は乾隆31年(1766)に叔父や姪と台湾の心北市地方に渡って数年間開墾をした。彼らは漢族の立ち入りが禁止されている「生番(高山族)」地区に入って農具を作ったが、佳里山の酋長に「鍛冶屋は入れ墨をしなければならない」と言われて刺青をした。その後米を買うために下山したところを捕らえられ、鎮平県に送り帰されたことが判明した。

【ケース2】来賓県における広東移民張老二らの強盗拉致事件(嘉慶11年・1806年)²⁰⁾：主犯の張老二は広東順徳県人で、嘉慶4年(1799)に窃盗事件を起こして安徽へ流刑となったが、脱走して広西平南県、来賓県などで雇われ人として潜伏していた。この年8月に張老二と同郷で桂平県に住む薛老四の家に至り、知り合いの楊發宗と共に招常茂(広西来賓県人)の質屋を襲う相談をした。彼らは保隴山の神廟に75人を集めたが、「心が揃っていない」ために結拜兄弟の儀礼を行なうことにした。彼らは楊發宗を大哥とし、張老二を二哥として、残りは年齢順に序列を定めた。そして神前で誓った後に出発した。

来賓県の石牙墟に到着した張老二らは、市場にある衣服店、雑貨店がみな招常茂の店であることを知り、「まとめて掠奪」することにした。彼らは店内を物色し、店番の鄒經正らを負傷させた。また酒屋の妻である李蔣氏など女性2名を拉致し、奪った品物と共に運び出した。盗品を山分けした後、張老二は李蔣氏に夫婦となるように迫り、彼女は恐怖の余りこれに応じた。張老二は広東高要県で1年近く潜伏した後、李蔣氏を故郷の順徳県桑麻郷に連れ帰って母親と同居させた。

【考察】これらは盗賊として処罰された移民の事例であるが、彼らの移住戦略をよく伝えている。その第一は流動性の大きさであり、張老二は摘発を免れるという目的もあって平南県、来賓県、桂平県を転々とした。また雑多な事業に取り組んだことも特徴の1つで、謝仕朋らは泥棒のほかに扇骨作り、繭売り、酒屋、香料販売、農業、農具作りなどの職業に従事した。なお興味深いのは黃喜虞が広西へやって来る以前に、彼の父親が台湾の少数民族地区への移住を試みていた事実である。彼らが失敗の危険を回避し、成功の可能性を広げるべ

く、複数の選択肢をにらみながら行動していたことがわかる。

これらの事例を見る限り、移住は潜伏や出稼ぎ目的の一時的なもので、移民たちに永住の意志はなかった。謝仕朋らは窃盗によって財産を築くと広東への帰還を決意し、張老二も「[広] 西省で妻を娶ってきた」と言って故郷へ戻ろうとした。また彼らが女性を連れ帰ろうとした点は、故郷での生活が結婚出来ない程に貧しかったことを物語る。もっとも黃喜虞の弟や父親が遅れて広西へ到着したように、移住の初期段階では家族を故郷に残すことも多く、彼らが広東に妻子を残していた可能性も否定できない。

次に注目すべきは移民の相互扶助組織としての同郷ネットワークと結拜兄弟の重要性である。謝仕朋は盗んだ金を同郷人の鄧配先に預けただけでなく、同郷の香料商である鄧觀濂が桂林を訪ねると、彼を家に泊めたうえ金を貸し与えた²¹⁾。張老二も同郷の薛老四を頼って桂平県を訪ね、強盗の計画を立てた。また張老二は犯行に先立ち、仲間の結束を図るために「神前に拝跪して誓いをたてる」²²⁾という結拜兄弟の儀礼をとり行なった。

彼らによる結拜兄弟は儀礼の内容こそ簡素であったが、こうした慣行が以下に検討する天地会のベースであったことは言うまでもない。また経済的な基盤を持たない下層移民ほど、これらインフォーマルな相互扶助組織に依存する部分が大きかった。

さきに貴州における移民の実態を調査した高溥の報告によると、興義府一带には嘉慶年間に四川、湖広から多くの移民が流入した。彼らの多くはミャオ族の耕地を小作する「極貧の戸」で、無理な開墾を進めたために山肌の表土を流出させてしまい、定着に失敗して再移住を迫られた。また雲南、広西へ向かう移民の中には「元手が乏しくなり、郷場や城市に滞留する者も少なくなかった」²³⁾という。このように行き場を失った移民に庇護を与えたのは、会館などに代表される既存の同郷団体ではなかったと考えられる。

ここで相互扶助を目的とする移民の結拜兄弟組織について、もう 1 つの例を見てみたい。

【ケース 3】 広東移民仇徳広らによる牙籤会の活動（乾隆 52 年、1787 年）²⁴⁾：仇徳広は広東西寧県人で、梁季舟（広東高明県人）と「他人に侮辱されても、互いに助け合う」ことを目的に結拜兄弟を行なうことにした。9 月に彼らは何昌輝、何亜秋（広東南海県人）および「もとより恒業のなかった」陳興遠（広東人）など 20 名を集め、西寧県杜城墟の新廟でそれぞれ銭 300 文を出して結拜儀礼を行なった。この時仇徳広は身に帯びていた銀の牙籤（つまようじ）を取りだし、各自が 1 つずつ携帯して暗号とすることにした。またこの組織の名を牙籤会と名付けた。

その後何昌輝は広西蒼梧県の文瀾村へ移住して店を開いた。すると仇徳広らは何昌輝の家を訪ね、新たに陳広源（広東人）ら 12 人を誘って文瀾村の古廟で結拜兄弟を行なった。この時仇徳広は会員の証として銀の牙籤以外に、新たに「賢義堂記」と刻んだ銀の印鑑を作ることにした。仇徳広らはこの印鑑を余分に作り、「舗戸」の陳徳高、蒼梧県人の曾英らに売って銭 10,000 文の利益をあげた。

12 月に蒼梧県民の李継久は堂叔の李南茹に、耕地の売却代金を支払うように求めたが拒

否された。そこで彼は友人だった陳興遠と相談し、李南茹の家を襲って恨みを晴らすことにした。陳興遠は牙籤会員の梁季舟、陳広源ら 9 人を集め、李南茹の家から牛 9 頭などを盗み出した。これに味をしめた陳興遠は、翌日ふたたび梁季舟ら 11 人を誘い、嚴思任の家へ行って金を貸すように迫った。嚴思任がこれを拒否すると、陳興遠らは強奪を始めたため、嚴家の人々が銅鑼を鳴らして助けを求めると、陳興遠らは「工人」の黎勝昌に怪我を負わせて逃亡した。捜査が始まると仇徳広は捕らえられ、梁季舟、陳興遠らと共に異姓結拜および強盜の罪で死刑となった。また何昌輝はウルムチに流刑となった。

【考察】 ここで登場する牙籤会は天地会と直接の系譜関係はないが、下層移民の相互扶助組織のあり方をよく示している。その中心は広東から広西へ移住した人々であり、とくに先に入植した何昌輝を頼って仇徳広らが蒼梧県を訪ねるなど、結拜兄弟のネットワークが移住を後押しする役割を果たしていた。また会員の資格は銀製の爪楊枝や印鑑といった目印と共に売買され、比較的豊かだった入会者は 1,600 文以上を支払った。彼らが不慮の事態に備える一種の保障としてこれらの組織を捉えていたことがわかる。

だが一度成立した結拜兄弟組織は、会員をとりまく社会関係に否応なく介入することになった。事件の発端となった李継久は牙籤会員ではなかったが、陳興遠を援助する形で多くの会員が報復行為に加担した。さらに牙籤会の創設者である仇徳広は、会員たちの行動がエスカレートするのを止められなかった。

清朝は下層移民の作ったこれらの団体を異姓結拜の反体制的組織と捉え、「血を飲って盟約を結び、表を燃やして兄弟となる」「年齢の順に従って序列を決めない」ことを基準として厳しい罪を課した²⁵⁾。だが先の張老二による結拜兄弟組織は無論のこと、牙籤会も「反清復明」のスローガンに代表される政治性を帯びてはいなかった。むしろ当局にとって危険だったのは、これらの組織が既存の社会秩序とは異なる紐帯を生み出した結果生まれる無軌道な暴力性であったと考えられる。

2. 広西における天地会の展開と移民社会

18 世紀後半に福建で創設された天地会は、その相互扶助的な側面ゆえに下層移民の間に広く浸透し、華南各省および華僑地域へ急速に勢力を伸ばした。広西の場合も例外ではなく、19 世紀に入ると各地で天地会が摘発を受けた。道光元年 (1821) に両広総督阮元は、広西における天地会の活動について次のように述べている。

さて粵西の民情はもとより淳樸であるが、ここは広東、湖南、雲南各省と境を接しているために、外省の游民が多くやって来て土地を耕す。その中にはたちの悪い者がおり、人々を誘って添弟などの会（天地会をさす）を結拜する。ついに郷民で勢いがなく弱い者が誘われて入会し、何かあった時に庇護を得ようとする。また裕福な家でも襲撃されるのを恐れて、結拜兄弟となって家を守ろうとする。

初め彼らは金を騙し取り、百年以上も前の古めかしい書物にならって会簿や腰につける印を作り、スローガンを伝授して、大哥とか師傅などと名乗る。あるいは天地会を結成する罪が重いことを知り、老人会などの名前に変えることもある。その人数は毎回一、二十人あるいは数十人と一定しないが、数百人が同時に一つの会を結ぶ例は見られない。たまに一人で二、三の会を結拝する者がおり、仲間が次第に増えると、人数が多いことを恃みとして盗みを働く。あるいは書役や兵丁と結び、良民を誘い惑わして、人々を率いて掠奪を行なうなど、実に地方の大害である。²⁶⁾

ここではまず天地会が「外省の游民」すなわち流動性の高い移民が持ちこんだ組織であり、土着の下層民や襲撃を免れたいと願う一部の富裕層へ浸透していったこと、天地会に対する禁圧が強化される中で、会名を変更するなどの変化が見られたことが指摘されている。また一度に組織されるメンバーの数は決して多くないが、結拝の回数を重ねるたびに会員のネットワークが広がり、徒党を組んで窃盗事件を起こすケースがあったこと、地方政府の末端を支える胥吏や兵士にも影響力を広げていたことがわかる。同様の認識は嘉慶年間に広西巡撫を務めた恩長の上奏にも見られた。彼は広西で摘発された天地会には必ず「東省の游民」がおり、嘉慶7年(1802)に広東東部の天地会蜂起が弾圧されて以後、多くの天地会員が広西に逃亡したこと、広西の土着民にも天地会を結成して掠奪を行なうことを「楽途」と見なし、これを真似る者が少なくなかったと述べている²⁷⁾。

ここでもう少し詳細を見てみたい。**【表1】**は嘉慶年間から道光初年にかけて広西の漢族地区で摘発されたか、漢族が主要メンバーだった天地会の活動を示したものである。その多くはやはり広東からの下層移民であり、[2]の張世聡(広東徳慶州人)と[13]の徐亜三ら3名(共に広東人)は「傭趁(雇われ人)」、[24]の劉玉隴ら7名(共に広東人)は「耕傭(農民あるいは小作人)」、[4]の潘老草(広東人)と[7]の古致升(広東人)は薬売り、[11]の呉崇茂(広東翁源県人)は屠殺業、[12]の羅亞耀(広東花県人)は雑貨商、[19]の蔡以農ら4名(広東永安県人)と陳日耀(広東羅定州人)は農民あるいは小商人、[20]の鄧望受と[25]の練老晩(共に広東人)は小商人であった。

こうした傾向は広東以外の地域からの移民や広西人の参加者にも当てはまる。例えば[16]の黄世可(福建人)と[21]の李泳懷(湖南衡陽県人)、[25]の傅老八(湖南人)、[8]の羅遠盛(岑溪県人)、陳琪(容県人)はいずれも小商人であり、[2]の楊開来(湖南永明県人)と[4]の趙興奇(平南県人)は雇われ人(傭趁あるいは雇工)、[8]の周炳成と何健受(共に藤県人)、[26]の朱儉暄ら15名(共に博白県人)は農民あるいは小商人だった。また[1]の馮老四(広東欽州人)と[3]の梁大有(広東南海県人)は元海賊、[23]の唐之莪(湖南零陵県人)、蔣拐頭(湖南東安県人)は芝居役者であったが、これらは天地会と下層社会との関わりをよく示す職業であった。

ちなみに広西の天地会は結成された場所の移民活動の特徴によって、構成メンバーのあり

表1 嘉慶年間の広西における天地会の活動（漢族地区を中心に）

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
1	嘉慶9年 (1804)	博白県 広東合 浦県	<p>◎合浦県人で「行医度活」の蔣正儒は、合浦県に寄居していた馮老四（欽州人）、林定幫（靈山県人）、王政清（博白県人）らと天地会を結成して「財物を搶掠」しようと考えた。3月に彼らは合浦県内の馬欄水地方に122名を集め、「飲血結盟」の儀礼を行なった。</p> <p>彼らはかつて「出洋爲盗」の経験がある馮老四を大哥総頭目とし、蔣正儒、林定幫、王政清らが頭目となった。馮老四は「出手不離三、開口不離本」の暗号を唱え、「天俯令」「三合主」と刻んだ木印や「招集群義」「順天發令先鋒」と記した旗を武器と共に作らせた。</p> <p>はじめ馮老四は4月15日に蜂起する予定だったが、官の搜索を受けると聞いて計画を早め、10日に欽州へ向けて出発した。官兵の追撃を受けた場合は海に出るつもりだった。合浦県の龍門墟で家畜を強奪した後、小江墟に至った彼らは、村人の抵抗を受けて博白県の蕉頭埔地方に逃れた。だが職員朱宗韶、武生賁世揚らが率いる練勇の攻撃を受け、馮老四ら11名が殺された。また博白・合浦両県の追及を受けて多くの者が捕らえられた。</p>	『天地会』7、 159-180 頁
2	嘉慶11年 (1806)	平楽県	<p>◎広東徳慶州人の張世聡、湖南永明県人の楊開来は平楽県沙子街で「備趁度日」していた。彼らは知り合いの李元隆（広東東莞県人）と「異郷勢孤」について語り、「遇有争毆、得有幫助、並可乘便行劫」のために天地会を結成することにした。彼らは84名を集め、この年6月に平楽県隴家嶺の古廟で結拜儀礼を行なった。</p> <p>彼らは各自銭300文を出し、李元隆を大哥、張世聡を二哥、楊開来を三哥とした。またニワトリの血を入れた酒を飲み、「遇事彼此幫助」を誓った。さらに李元隆は人々に×印に掲げた刀の下をくぐらせる儀礼を行なった。そして李元隆は「出手不離三、開口不離本」の10文字からなる暗号を伝授し、服装や傘の持ち方などを仲間の目印とした。やがて李元隆は病気になるまで広東へ帰り、人々は散じた。</p> <p>この時会員となった鄧弗成（広西陽朔県人）は恭城県蓮花塘で同じく会員の王亜奇（広東西寧県人）と会い、臨桂県東郷にある譚添錫の家を襲うことにした。9月に彼らは28名（うち天地会会員が13名、非会員が15名）で譚添錫の家に押し入り、金や衣服を奪って逃亡した。やがて鄧弗成、王亜奇は捕らえられ、張世聡、楊開来らと共に「復興天地会」の罪で処刑された。</p>	『天地会』7、 180-192 頁
3	嘉慶11年 (1806)	宣化県	<p>◎広東南海県人の梁大有は、9月に故郷で殺人事件を起こして宣化県に潜伏している何有信（広東欽州人）と那楊墟で出会った。何有信が欽州へ帰りたがっていることを知った梁大有は、天地会を結拜すれば「凡遇行劫打降、得有幫助」であり、一緒に結拜するように勧めた。また梁大有はかつてベトナムへ渡り、武将となったとホラを吹いた。これを信じた何有信は天地会を結成することにした。</p> <p>梁大有、何有信らは29名を集め、宣化県の職員であった方仕倫の家に集まって結拜儀礼を行なった。彼らは銭200文を出し、梁大有を大哥、何有信を二哥、方仕倫を三哥として拜んだ。また梁大有は閔帝の位牌を置き、誓いを立てた者に「出手不離三、開口不離本」の暗号などを伝授した。さらに会簿を作成して、これを何有信に預けた。</p> <p>12月に何有信が欽州へ帰郷すると、以前から彼と対立していた班国邦は何有信の家で会簿を発見した。班国邦は官に訴えようとしたが、会簿の人数が少ないと重罪にならないと考</p>	『天地会』7、 192-200 頁

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			え、かねてから仲の悪かった韋泳秀ら 112 人を名簿に書き加えた。また梁大有が海賊だったことを思い出し、梁大有が兵馬を率いているという「謀逆重情」を捏造して、ニセの印鑑などを押して役所に訴えた。 捜査が始まると何有信、方仕倫らは捕らえられ、「復興天地会」の罪で斬首された。また班国邦らも叛逆事件を捏造した罪により死刑となった。	
4	嘉慶 12 年 (1807)	上林県	◎上林県へ「売薬」に来た広東人の潘老草らは、李桂（四川西昌県人）と周宗勝（広東南海県人）と会い、天地会を結拝すれば「凡遇行劫打降、得有幫助、不致被人欺負」であると聞いて入会を望んだ。6 月に潘老草ら 30 名は錢 200 文ずつを出し、東山嶺の関帝廟で結拝儀礼を行なった。 彼らは李桂を大哥、周宗勝を二哥とし、李桂から「出手不離三、開口不離本」の暗号を伝授された。また李桂の発案によって 30 名を天、地 2 号に分け、李桂、周宗勝が 1 号（15 人）ずつ管理することにした。 7 月に李桂、周宗勝は潘老草ら 28 名に命じて、宜山県思練堡にある莫驕の家を襲わせた。だが潘老草は村人に捕らえられ、李桂、周宗勝も逮捕されて、それぞれ「復興天地会」の罪などで処刑された。	『天地会』7、 201-206 頁
5	嘉慶 13 年 (1808)	平南県	◎平南県人の盧閑家らは「雇工」の趙興奇と会い、天地会を結拝すれば「既可斂錢使用、又可搶劫獲利、遇事得有幫助」であると話し合った。そこで彼らは陸江南（平南県人）、楊顯超（桂平県人）、張亞勝（広東南海県人）、莫可幾（藤県人）ら 13 名を集め、8 月に盧閑家の後園で結拝儀礼を行なった。彼らは各々錢 400 文を出し、盧閑家を大哥、趙興奇を師傅として、刀下をくぐって誓いを立てた。趙興奇は「開口不離本、出手不離三」の暗号を伝授した。 9 月に楊顯超と粟金潮（平南県人）は 16 人を集め、平南県柳村の後山で結拝儀礼を行なった。彼らは粟金潮を大哥、楊顯超を師傅とした。また同月に楊顯超と陸江南は 10 人を集めて平南県太平里の空き地で結拝し、陸江南を大哥、楊顯超を師傅とした。 9 月に楊顯超、陸江南、粟金潮は 58 人を集め、柳村の後山で結拝した。彼らは陸江南を大哥、粟金潮を二哥、楊顯超を師傅とした。10 月に会員の覃文祖、蔣宗突、柳榮均は非会員の李達甘らと、「窮苦」のため東経村にある廖嘉尚の家を襲い、衣服や穀物、子豚などを奪った。 これらの事実が発覚すると盧閑家、趙興奇、楊顯超、粟金潮らは捕らえられ、「復興天地会」の罪で処刑された。また盗みを働いた覃文祖らも死刑となった。	『天地会』7、 215、236-238 頁
6	嘉慶 13 年 (1808)	容 県	◎11 月に黎樹（容県人）の家を訪ねた韋老三是、「窮苦難度、常被人欺」であると語り、「遇事彼此幫助、並可乘機搶劫銀錢使用」のために天地会を結成することにした。彼らは林木水、黃亞二（北流県人）ら 40 人を集め、牛頭嶺の廟内で結拝儀礼を行なった。人々は黎樹を大哥とし、韋老六を師傅とした。また刀下をくぐる儀礼を行ない、「開口不離本、出手不離三」の暗号を伝授して、紅布を与えて会員の印とした。 12 月に林木水は会員の張日華（容県人）ら 8 人で、陳得富の錢 7,450 文を奪った。陳得富が保正と楊亞三の家を搜索し、盗んだ袋を発見すると、林木水らは金を返した。だが林木水は再び楊亞三ら 3 人で武生申莊の錢 4,400 文を盗んで捕らえられた。また逮捕された黎樹も嘉慶 11 年(1806)に窃盜を働いた事実が発覚した。黎樹、林木水、張日華らは「復興天地会」の罪で処刑され、黃亞二らは流刑になった。	『天地会』7、 201-206 頁

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
7	嘉慶 13 年 (1808)	藤 県	<p>◎古致升は原籍広東で、平南県へ来て薬売りをしていた。3 月に丹竹墟で蘇顕名（広東人）と会った彼は「売薬利微、並時常被入欺侮、另謀生理」と不満を述べた。すると蘇顕名は天地会を結成することを勧め、結拜の方法を指南した。その後蘇顕名は広東へ帰った。</p> <p>4 月に古致升は天地会の結成を決意し、「小販耕種」をしていた李元威（広東高要県人）と謝成隴（藤県人）など 32 名を誘い、古得埔の古廟で結拜儀礼を行なった。</p> <p>彼らはそれぞれ銭 516 文を出し、周勝海を大哥、古致升を師傅とした。また刀下をくぐる儀礼を行ない、「開口不離本、出手不離三」の暗号を伝授すると共に、「江洪汨漆」と記した紅布を与えて腰凭とした。</p> <p>6 月に梁拱照、監生覃宗賢が船で金を運ぶことを知った会員の黄徳桂は、李元威、謝成隴らと古掃灘で船を待ち伏せて金を奪った。李元威らは捕らえられて死刑となった。</p>	『天地会』7、 282、285 頁 『宮中檔嘉 慶朝奏摺』 21 輯、362 頁
8	嘉慶 13 年 (1809)	岑溪県	<p>◎羅遠盛（岑溪県人）と陳琪（容県人）は親戚で、共に「小販生理」していた。この年 9 月に陳琪は梁元中らと天地会を結拜し、梁元中を大哥とした。また彼らは「二房祖師方大洪」の位牌と祀り、「開口不離本」の暗号を伝授した。</p> <p>いっぽう羅遠盛は翌年 1 月に岑溪県で黄組綬（岑溪県人）に従って天地会を結拜した。彼らは「長房祖師蔡德忠」の位牌を立て、黄組綬を大哥とした。その後羅遠盛、陳琪は信宜県へ檳榔、タバコの葉を売りに行つて捕らえられた。</p>	『天地会』7、 260 頁
9	嘉慶 14 年 (1809)	藤 県	<p>◎周炳成と何健受は共に藤県人で、「耕賃生理」していた。4 月に周炳成と毛六は「平日被人欺侮」のため、天地会を結拜することを決意し、何健受、「耕地度日」の何恵徳（藤県人）ら 23 名を集めて、黎木埔地方で結拜儀礼を行なった。彼らは銭 200 文を出し、周炳成を大哥、毛六を師傅とした。また刀下をくぐる儀礼を行ない、「開口不離本、出手不離三」の暗号を伝授して、各人に紅布を与えた。</p>	『天地会』7、 263、271 頁
10	嘉慶 14 年 (1809)	平南県	<p>◎曾賢は平南県人で、游得二（広東南海県人）、陳亜五（広東新会県人）と面識があった。7 月に游得二、陳亜五は曾賢の家に至り、広東で天地会が流行しており、「可以騙錢」であると告げた。貧困だった曾賢は天地会を結拜する決意を固め、温村社廟に 19 人を集めて結拜儀礼を行なった。彼らは各自銭 330 文を出し、曾賢を大哥、游得二を二哥、陳亜五を師傅とした。また刀下の儀礼と「開口不離本、出手不離三」の暗号伝授を行ない、各人に紅布を与えた。</p> <p>8 月に曾賢は游得二、陳亜五と再び 18 人を集め、各自 200 文を出して結拜儀礼を行なった。今回は曾賢を大哥、陳亜五を二哥、游得二を師傅とした。だが官兵の搜索を受けて陳亜五は殺され、曾賢は死刑となった。</p>	『天地会』7、 264 頁
11	嘉慶 14 年 (1809)	平南県	<p>◎吳崇茂は広東翁源県人で、平南県思旺墟で「屠宰」を営んでいた。6 月に知り合いの陳亜五（広東新会県人）が彼の家を訪ねて「受人欺侮」を訴えると、吳崇茂は天地会を結成することを決め、8 月に思旺墟外で 53 名を集め、各自銭 250 文を出して結拜儀礼を行なった。彼らは吳崇茂を大哥、陳亜五を師傅とした。</p> <p>その後 [10] の曾賢による天地会が摘発されると、陳亜五は壮丁の羅亜嬌に殺された。すると会員の梁亜木は師傅であった陳亜五の仇を討とうと考え、11 月に同会員で「小売營生」していた劉亜甲（平南県人）ら 5 人で桂平県江口墟に近い龍門灘へ至り、羅亜嬌を殺して死体を河中に捨てた。その後劉亜甲らは捕らえられて処刑された。</p>	『天地会』7、 300、326 頁
12	嘉慶 14 年	凌雲県	◎羅亞耀は広東花県人で、凌雲県の河口街で雑貨店を開いてい	『天地会』7、

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
	(1809)		<p>た。8月に黄老三ら3名（共に広東高明県人）が店を訪ね、広東に天地会があり、結拜すれば「可以保守家財、出外無人欺侮」であると告げた。</p> <p>羅亜耀は天地会を結成しようと考え、18人で河口の社壇で結拜儀礼を行なった。彼らは各自錢200文を出し、羅亜耀を大哥、黄老三を師傅とした。また刀下をくぐる儀礼を行ない、「開口不離本、出手不離三」の暗号を伝授した。</p> <p>また饒四成は9月に翁裕昌（広東龍川県人）が天地会を結成しようとしているのを知って、これに加わった。彼ら22名は久簍山に集まって錢200文ずつを出し、翁裕昌を大哥として結拜した。羅亜耀は捕らえられて処刑された。</p>	267 頁
13	嘉慶 15 年 (1810)	平南県	<p>◎徐亜三、徐亜四、鍾大番らは広東から平南県へ移住して「雇趁度日」していた。8月に思旺墟で会った3人は、貧困のため天地会を結成して「騙錢使用」することにした。彼らは30人で空屋に集まり、錢200文を出して結拜儀礼を行なった。徐亜三を大哥、徐亜四を二哥として、刀下をくぐる儀礼を行ない、「開口不離本、出手不離三」の暗号を伝授した。集めた錢は3人が1,200文ずつ山分けした。徐亜三、徐亜四は死刑となり、鍾大番は新疆へ流された。</p>	『天地会』7、 305 頁
14	嘉慶 15 年 (1810)	容 県	<p>◎謝輞典、謝輞蘭兄弟（容県人）は嘉慶 12 年 (1808) に平南県人の何善伝が天地会を結成するので、参加するように勧められた。5月に彼ら13人は容県順里の小屋で結拜儀礼を行ない、謝輞胡を大哥、何善伝を師傅とした。この年7月に鍾秀も天地会を結成しようと図り、謝輞典に参加を求めた。彼らは9人で結拜し、鍾秀を大哥兼師傅とした。</p> <p>嘉慶 15 年 8 月に謝輞蘭と二兄の謝輞管は、梁組正と天地会を結成することにした。彼ら44人は五里口の北帝廟に集まり、各自錢250文を出して結拜儀礼を行なった。梁組正が大哥、謝輞蘭が師傅となった。</p> <p>その後梁組正は会員の農肇海らと耕牛や穀物を掠奪した。また謝輞蘭も非会員の梁亜二と水牛を盗んだことが発覚した。謝輞典兄弟と梁組正らは死刑になった。</p>	『天地会』7、 354 頁
15	嘉慶 16 年 (1811)	荔浦県	<p>◎李遇恩は已革の監生で、知り合いの荔枝嵩が浙江人の范七から「反清復明、真人出在四川辺」と記された「逆書」を渡されたと聞いた。また「辛未年（即ち嘉慶 16 年）冬に天運が転動」するため、天地会を結成すれば「富貴」になると勧められた。そこで李遇恩は已革武生の藍輝彩らと天地会の結成を決意し、12月に131人（うち29人は当日姿を見せず）を莫背嶺に集めて結拜した。</p> <p>人々は藍輝彩を総大哥とし、顔庭玉を師傅として、刀をくぐって酒を飲んだ。翌年3月に彼らは蜂起して「藍輝彩が王になるのを助ける」予定であったが、この計画を知っていたのは蔣黒狗ら12名のみだった。</p> <p>1月に荔浦県の甲長や紳士が「李遇恩が結党して掠奪を働き、婦女を誘拐しており、被害を受けた家が多い」と通報し、平楽府知府の慶吉が派兵して75名を捕らえた。李遇恩、藍輝彩、荔枝嵩、顔庭玉は凌遲処死となった。</p>	『天地会』7、 328 頁
16	嘉慶 16 年 (1811)	永安州	<p>◎黄世可 は原籍福建で、平南県に「寄居」して「小販」で生活していた。いつも永安州の市場へ出かけるため、李元翠（永安州人）と面識があった。12月に2人は生活の貧しさを語り、黄世可は天地会を結成すれば「騙錢」および「搶劫得財」が可能だと考えた。李元翠は従う者が少なければ無駄だと答えたが、黄世可は「自分の息子は氣転がきくので、彼に朱姓を名のらせて明朝の末裔とし、会首とすれば、従う者は増えて金も集まる」と提案した。</p>	『天地会』7、 333 頁

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			<p>そこで2人は永安州杜木墟の武將廟に24人を集め、1人1,200文を出させて結拝儀礼を行なった。朱姓に扮した黄世可の息子がまず神に祈り、続いて黄世可を総大哥、袁老二を大哥、李元翠を師傅とした。また黄世可は息子をイスに座らせ、人々に拝ませた。集めた9,000文は黄世可親子と袁老二、李元翠で山分けした。</p> <p>翌年1月に黄世可らは再び天地会を結成しようとしたが、この動きを知った平樂府知府恵吉は李元翠を逮捕させた。黄世可は平南県へ逃れたところを捕らえられた。また会員の孫老水が嘉慶15年(1810)に窃盗事件を起こしていた事実も発覚した。黄世可は「陰謀不法の情事はない」と供述したが、明の末裔を名のった罪は大逆罪に相当するとして凌遲処死となった。また彼の息子と袁老二、李元翠も死刑に処せられた。</p>	
17	嘉慶16年 (1811)	昭平県	<p>◎梁承蘭、古士風は昭平県人で、欧取受(広東東莞県人)と面識があった。12月に古士風らは梁承蘭の家に至り、貧困と外出時に助けを得られないことを話し合った。そこで梁承蘭は天地会を結成することを決意し、欧取受をはじめ31人を集めて白鴿坪で結拝儀礼を行なった。彼らは1人銭300文を出し、古士風を大哥、梁承蘭を師傅として刀下の儀礼などを行なった。その後彼らは捕らえられ、梁承蘭、古士風ら9名が「復興天地会」の罪で死刑となった。</p>	『天地会』7、 336頁
18	嘉慶17年 (1812)	桂平県	<p>◎尹之屏と何達佳は桂平県人で、村の塾教師だった尹之屏は毎年謝礼金の帳簿を付けていた。正月に何達佳は尹之屏の家に至り、「遇事有人幫助、出外無人欺侮、又可騙錢分用」のために天地会を結成することにした。2人は24人を集め、黒石村脇の都官廟で結拝儀礼を行なった。</p> <p>尹之屏は他人から天地会と見破られないように、大哥、師傅に代えて正名、結万の称号を用いた。また扶紅門、把風、把劍門、保拳、帶令などの役職(執事)を作り、入会者を振り分けた。彼らは銭300-1,000文を出し、何達佳を総大哥、辛良桂を大哥として、これを正名と呼んだ。また尹之屏を結万すなわち師傅とした。尹之屏、何達佳、辛良桂は集めた銭6,300文を山分けした。</p> <p>尹之屏は結拝する人数が少ないと金も儲からないと考え、独自に歌を作ることにした。彼は嘉慶12年(1807)分の謝礼金の帳簿を取り出し、「替天行道李朱洪、異姓原来共一宗」「不斬忠心与義氣、單斬清朝反骨人」「五祖扯起招軍旗、斬清絕北盡帰明」「中心義氣当天敬、掃清胡北助王公」などと書き記した。</p> <p>たまたま何達佳は誘拐事件の犯人として捕らえられ、結拝儀礼の名簿が押収された。尹之屏も逮捕されて「悖逆」の歌が発見され、天地会結拝の事実が明らかになった。尹之屏は大逆罪で凌遲処死となり、何達佳、辛良桂も死刑となった。</p>	『天地会』7、 346頁
19	嘉慶17年 (1812)	蒼梧県	<p>◎蔡以農、龔火保ら4名は広東永安県人で、陳日耀(広東羅定州人)、胡景朋(蒼梧県人)、李亞一(岑溪県人)、凌四(藤県人)らと面識があり、それぞれ「耕種小販」で生計を立てていた。9月に蔡以農は広平墟で張老五と会って貧困ぶりを話したが、天地会を結成すれば「遇事得有幫助、並可斂錢分用」であると考えた。そこで彼は龔火保ら38人を集め、1人銀5銭を出して家の空き地で結拝儀礼を行なった。</p> <p>人々は蔡以農を大哥、胡景朋を師傅として、神前で誓いを立てた。また刀下をくぐる儀礼などを行ない、人々に銀3銭と引きかえに紅布に丸を描き、中に「結義弟兄」の4文字を記した腰凭を与えた。集めた銀10両余は蔡以農が用いた。</p> <p>蔡以農は入会の誘いに乗らなかった陳敬湖に恨みを懷き、会員の張老五と共に陳敬湖に金を貸すように迫った。陳敬湖がこ</p>	『広西会党 資料匯編』 124頁

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			れを断ると、10月に会員の龔火保、陳日耀、凌四らを連れて陳敬湖の家を襲い、金や衣服、首飾り、家畜などを盗んだ。捜査が始まると蔡以農らは捕らえられ、「復興天地会」の罪で死刑となった。	
20	嘉慶 18 年 (1813)	賀 県	◎鄧望受、趙宗義は「広東、江西游民」で、賀県に移住して「小賃傭種」していた。5月に彼らは「異郷出外、人孤力単」について語り、添弟会を結成することにした。和平冲に集まった32名は錢400文を出し、鄧望受を大哥、趙宗義を師傅とした。また刀下をくぐる儀礼を行ない、「開口不離本、出手不離三」の暗号を伝授した。その後彼らは故郷へ帰ったが、再び賀県を訪ねたところを逮捕された。	『天地会』7、 396 頁
21	嘉慶 20 年 (1815)	恭城県	◎李泳懷は湖南衡陽県人で、恭城県で「小賃營生」していた。11月に彼は知り合いの梁老三（広東佛山鎮人）と会い、「孤身無靠」について語った。すると梁老三は彼の親戚である梁老九が恭城県で結拜兄弟を行ない、忠義会と名づけたこと、他人の侮辱を免れるばかりか、金を出せば大哥となることも出来ること、さらに総大哥になれば、会員は全てその命令に従うこと述べた。李泳懷はこれを信じ、梁老三と11人を集めて樸木寨の古廟で結拜儀礼を行なった。 梁老三はテーブルに「忠義堂」と記した紅紙を貼り、関帝の位牌を設けた。また竹皮で円を作り、すでに会員だった老連和尚ら6名に刀を手を持たせた（これを「把圈」と呼び、必ず「旧会の人」が担当することになっていた）。梁老三は総大哥を名のり、錢3,000文を出した李泳懷が大哥となった。そして彼らは「過三関」「過火焰山」などの儀礼を行ない、血の入った酒を飲んで名前を記した表文（祈祷文）を焼いた。ただし発覚を恐れて会員名簿は作らなかった。 梁老三はこの年8月にも欧発祥ら7名と結拜し、4,000文を出した欧発祥を大哥とし、旧会員の鄭謹賓らが把圈を担当した。21年(1816)6月に李泳懷も仇可達、脅されて従ったヤオ族の俸臣信ら10人を集めて結拜儀礼を行ない、錢3,200文を出した陳占鰲が大哥となった。8月には梁老三の親戚である梁老九が広東から至り、ヤオ族の李富有、李宗臣を含む13人で結拜儀礼を行なった。この時は出資額の多かった李徳光が大哥となり、李泳懷は把圈となった。 さて李泳懷は総大哥になりたいと考え、梁老九に9,000文を与える約束をした。李泳懷が手付けに2,000文を出すと、梁老九はさらに108文を出すように求め、「彪寿和合」の4文字を記した紅布の腰凭を与えた。8月に梁老九は再び陳咪眼らと結拜儀礼を行なったが、このとき把圈を担当した欧発祥も総大哥になりたいと申し出た。だが彼は6,000文を払う約束をしたものの持ち合わせがなく、梁老九は腰凭を与えなかった。 欧発祥が総大哥になると聞いて怒った李泳懷は、欧発祥を訪ねて2人は言い合いになった。欧発祥は李泳懷が会員の妻を寝取ったことを罵り、棍棒で李泳懷を殴りつけて負傷させた。梁老九は欧発祥に治療費を出させてその場をとりなしたが、李泳懷から紅布の腰凭を取りあげた。その後も梁老九は湖南永明県で3度にわたり結拜儀礼を行なったが、永明県知県楊耀曾に探知されて捕らえられた。	『天地会』7、 368 頁
22	嘉慶 22 年 (1817)	鬱林州	◎黎開紹は鬱林州船埠街の人で、彼の兄である黎開續と共に武挙人に合格した。彼らは人となり「強横」で、李昌泰と知り合いだった。5月に黎開紹は天地会を結成しようと考え、李昌泰に蔡二ら40余人を集めさせた。人々は彼らに対する恐怖心から従わざるを得ず、各自錢200文を出した。 6月に彼らは六成寺で結拜儀礼を行ない、黎開紹は大哥、李	『广西会党 資料匯編』 143 頁

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			<p>昌泰は師傅となった。黎開紹は会員同士で「老表」と呼び合い、服の襟を閉じず、弁髪形の髪を変えて目印とすると決めた。また彼はニワトリの首を切り、今後心を1つにして助け合わないとニワトリと同じ目に遭うぞと宣言した。</p> <p>ところで黎開縝らが住んでいた船埠街は商業の中心地で、車の往来も頻繁だった。嘉慶14年(1809)に黎開縝兄弟は車行を作り、客商が車1輛を雇うたびに銭30文を徴収した。また停泊する大船から銭50文、小船から銭30文を取った。</p> <p>嘉慶17年(1812)から黎開縝は福綿墟で私塩販の警備を担当した。毎年正月に彼は100人余りの巡丁を率い、「奉憲緝私」と記した旗を立てて福綿墟に訪れ、「放砲祭旗」するなどの年賀の儀礼を行なった。彼が不在の時は彼の長寿を祈る紙牌を焼き、巡丁らに拝ませた。広西巡撫の富綸はこれらの事実を知り、黎開縝兄弟の武舉人資格を剥奪した。</p> <p>黎開縝兄弟が逮捕されると、彼らが合浦、靈山県の「盗匪」を匿い、女性を掠奪して妾にしたなどの告発が相次いだ。それらは誣告であることが判明したが、黎開紹は異姓結拜の罪によって絞首刑になった。また黎開縝は天地会に参加しなかったが、私塩取締りにおける「兇横」な態度や客商に対する搾取によって、「棍徒」として極辺の地に流刑となった。</p>	
23	嘉慶24年 (1819)	灌陽県	<p>◎唐之莪(湖南零陵県人)と蔣拐頭(湖南東安県人)は永集班の芝居役者で、唐之莪の祖父は地理先生として各地を廻った。彼は祖父の書籍の中から天地会の暗号や口訣を記した冊子を見つけ、結拜して金を稼ごうと考えて隠し持っていたが、仲間の役者は気づかなかった。</p> <p>7月に唐之莪は灌陽県黄牛市で蔣五益(灌陽県人)と会い、「孤身窮苦」について語った。唐之莪は天地会を結成すれば「希図搶劫、並可騙銭使用」とであると説得し、蔣五益もこれに従った。彼らは蔣拐頭や卿老三、黄牛市の塘兵をしていた王繼隴ら14人を集めて黄牛市の山岩で結拜儀礼を行った。</p> <p>彼らは銭560文ずつ出し、唐之莪を大哥、卿老三を師傅とした。唐之莪と卿老三は竹製の円(圈)外に刀を持って立ち、入会者は刀下とテーブルをくぐった。そして唐之莪は「有忠有義桌下過、無忠無義刀下亡」と唱え、「開口不離本、出手不離三」の暗号を伝授した。さらに唐之莪は草紙で腰兜を作って人々に分け与え、「日月光照、尽忠報國」と記した紅紙と紙銭を焼いて散会した。</p> <p>8月に蔣五益は再び18人を集め、毛栗坪で結拜儀礼を行なった。蔣五益が大哥、唐之莪が師傅となり、蔣五益が暗号などを伝授した。その後唐之莪は湖南へ戻ったが、蔣五益は翌年1月にも灌陽県の差役である王立、伍茂ら33人を集めて結拜し、蔣世現を大哥、葉老二(広東人)を師傅とした。だが結拜後に恐ろしくなった陳儒政、胡文星は、慶生の蔣宏慈に天地会結成の事実を告げ、翌日灌陽県に自首した。</p> <p>報告を受けた灌陽県知県の王涇は、兵役を派遣して蔣世現、王繼隴ら16人を逮捕した。取調べに対して蔣世現らは結拜兄弟を行なったことは認めたが、天地会を結成したのではないと主張した。王涇は塘兵の王繼隴が参加した事実は自分も処分の対象となるうえ、差役の伍茂が捕まらないため、25年2月に彼らの入会については伏せたまま、「不法悖逆の証拠はない」結拜兄弟の事件を摘発したと報告した。</p> <p>いっぽう伍茂がなかなか逮捕されないのを知った蔣宏慈らは、役所内の差役仲間が庇い立てしていると考え、各地の天地会会員が報復のために灌陽県に集まっていると両広総督衙門へ訴えた。また灌陽県出身の内閣侍読学士である卿祖培に手紙を送</p>	『天地会』7、372-390頁

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			り、地方政府が供述内容を改めて事件のもみ消しを図っていると告発させた。 清朝が調査を命じると、唐之莪、蔣拐頭は湖南で逮捕され、蔣五益、王繼隴、王立、伍茂らと共に死刑となった。また処分を恐れて事態を取り繕った知縣王洱、王繼隴らの入会を防げなかった把総劉桂榮は解任されて新疆へ送られた。	
24	嘉慶 25 年 (1819)	西林県	◎劉玉隴ら 7 名は広東からの移民で、西林県で「耕傭」して暮らしていた。5 月に劉玉隴は劉小常と会い、「孤身出外、恐人欺侮」と話した。すると劉小常は天地会の「拝会の抄簿と表文」を持っており、天地会を結成すれば「遇事得有幫助、並可斂錢分用」であると誘った。そこで劉玉隴ら 10 人は各自銀 230 文を出し、那念村の高角山で結拝儀礼を行なった。 人々は劉小常を師傅、劉玉隴を大哥とし、「洪令」の位牌を設けて跪き祈った。劉小常は「開口不離本、出手不離三」の暗号を伝授し、自分の持っていた抄簿、表文を劉玉隴に渡して、これを大哥の証明とした。その後劉小常は病死し、劉玉隴は捕らえられて死刑になった。	『天地会』7、 415 頁
25	道光元年 (1821)	陽朔県	◎練老晩は広東、傅老八は湖南からの移民で、それぞれ小商売を営んでいた。5 月に練老晩は傅老八と会って貧困ぶりを話し、天地会を結成すれば「遇事得有幫助、並可斂錢分用」であると考えた。そこで 2 人は 23 人を集め、秦連有の家で結拝儀礼を行なった。人々は銀 300 文を出し、3 つの竹の圈（円）をくぐった。そして傅老八を大哥、練老晩を師傅とし、練老晩は「開口不離本、出手不離三」の暗号を伝授した。その後練老晩、傅老八は捕らえられ、「復興天地会」の罪で死罪となった。また秦連有らは新疆へ流刑になった。	『天地会』7、 399 頁
26	道光 7 年 (1827)	博白県	◎朱儉暄ら 15 名はいずれも博白県人で、「耕傭小賃」によって生活していた。12 月に朱儉暄は梁才の家で生活苦について語り、結拝兄弟をすれば「斂錢分用、遇事得有幫助、免人欺凌」と考えた。そこで彼らは林芝閔ら 23 人を集め、雞石抓で結拝儀礼を行なった。 天地会の暗号を知らなかった朱儉暄は、「非親有義須當敬、□友無情切莫交、忠義本□聚會、当天誓表真情」という誓詞を作り、布に記して林芝閔に保管させた。また「過後有事、衆兄弟大家相幫」と宣誓し、ニワトリの血を入れた酒を飲んで散会した。その後結拝兄弟の事実が発覚すると、林芝閔は親戚を頼って四川へ逃げたが、永寧県で捕らえられて病死した。また朱儉暄は死刑に、残りの者も辺境へ流刑になった。	農民運動類 8895-4 号 軍機檔 (台湾) 60671 号

方に差異が見られた。珠江の上流にあたる東南部各県では広東移民の比重が高かったが、[23] の灌陽県では広西北部の移民に湖南、江西出身者の割合が高かったこともあり、参加者で出身地の明らかな 54 名のうち湖南人が 15 名、江西人が 8 名と多数を占め、広東出身者は 3 度目の結拝で師傅となった葉老二 1 名に過ぎなかった。また移民と地元民の比率も組織によってバラツキがあり、[23] では灌陽県人が少なくとも 18 名、隣県にあたる全州人が 6 名と地元出身者が半数近くを占めた²⁸⁾。また東南部に位置する [6][14] の容県、[8] の岑溪県、[9] の藤県、[18] の桂平県、[22] の鬱林州、[26] の博白県では史料を見る限り広西人によって天地会が組織されたが、逆に西部の少数民族地区に位置する [12] の凌雲県、[24] の西林県ではほぼ漢族移民によって結拝儀礼が行なわれた。

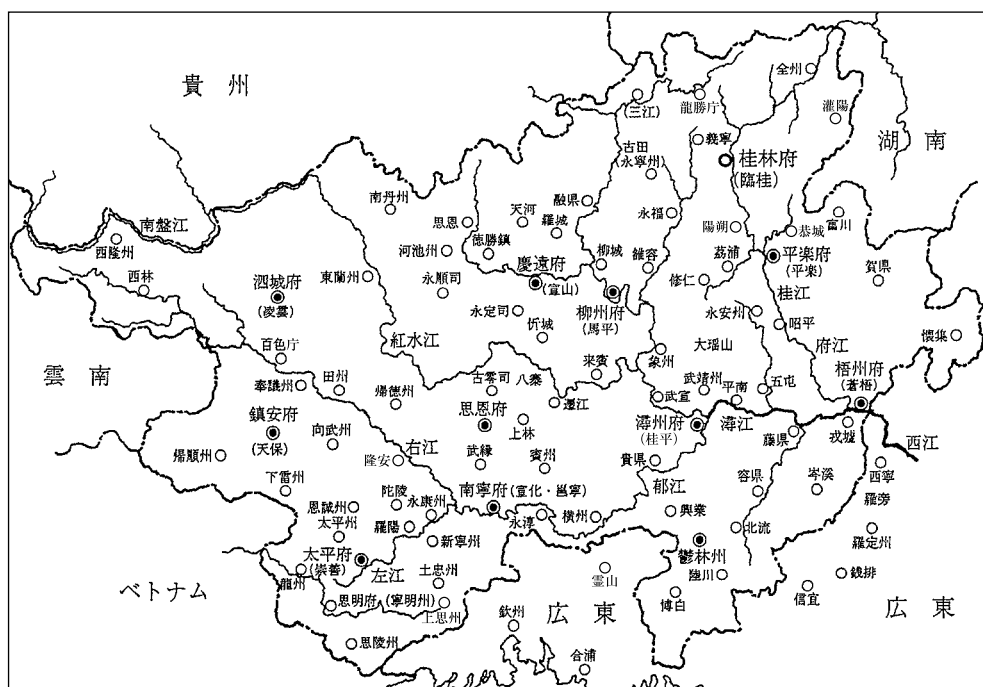


図1 広西省地図（明清時代）

すでに筆者は広西中、西部のチワン族地区における天地会の活動について検討し、当初漢族移民によってもたらされた天地会が、漢文化受容の中でアイデンティティの喪失に苦しむ一部のチワン族に選り取られ、チワン族がみずから結成した天地会も存在したことを指摘した²⁹⁾。この議論に基づけば、上に見た傾向は広東との交流が盛んだった東南部ほど天地会が早く社会に浸透し、広西人自身による組織作りが進んだ結果と解釈出来る。また [21] の恭城県における俸臣信、李富有らは「脅されて従った」³⁰⁾ヤオ族であった。道光12年(1832)に湖南、広東、広西省境で発生した趙金龍の率いるヤオ族反乱が、天地会員に対する報復をきっかけに蜂起した事実は良く知られている³¹⁾。俸臣信らの事例は天地会がヤオ族の住む山間部まで勢力を伸ばしていたこと、参加を強要されたという証言を踏まえても、両者の関係は対立ばかりではなかったことを示唆している。

さて先の史料で阮元が指摘したように、天地会には下層移民だけでなく「家を守ろうとする」「裕福な家」も参加していた。【表1】の中では [15] の李遇恩、藍輝彩（荔浦県人）が元々監生、武生員の出身であり、村の塾教師をしていた [18] の尹之屏（桂平県人）と共にそれなりの経済的基礎を持っていたと推測される。また [21] の李泳懷は大哥および総大哥の地位を購入するために数千文の銭を出しており、資産を持つ人々にとっても天地会の相互扶助的な性格は一種の保険として魅力を持ったことがわかる。

また興味深いのは [22] の黎開紹、黎開續兄弟（鬱林州人）のケースで、2人は武挙人の資格を持っていた。彼らは車行を作って客商から車の斡旋料を徴収したり、埠頭に停泊する船

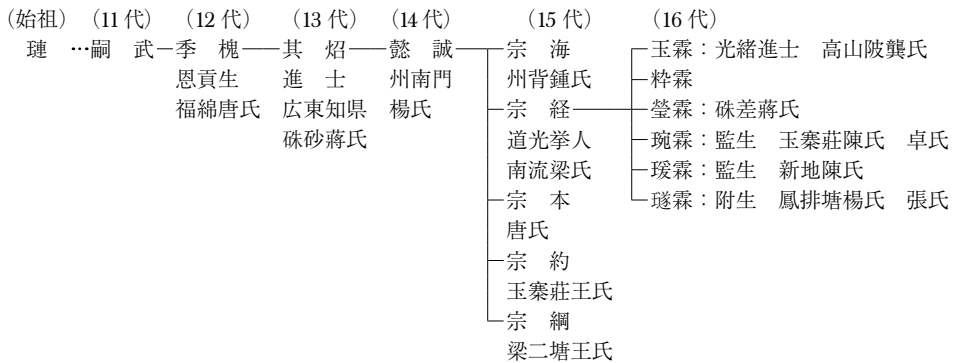


図2 鬱林舉人蘇宗經（江岸村人）の婚姻関係

から手数料を取った。また市場における私塩販の取締りを任されるなど、地域社会の中での発言権を有していたように見える³²⁾。

それでは彼らは何故天地会を組織したのだろうか。光緒『鬱林州志』によると、黎開紹兄弟は元々烏石潭村の出身で、同族と見られる黎開経（乾隆年間武舉人）は江蘇鎮海衛の千総となった。だが烏石潭村黎氏には他にめぼしい科挙合格者はおらず³³⁾、清初以来進士、舉人のタイトルは多くが南門口陳氏、高山村牟氏、州背村と江岸村の蘇氏、州背村と雲石村の楊氏、新村文氏、福綿村唐氏などに独占されていた³⁴⁾。

次に鬱林州で行われた共同事業について見ると、道光11年(1830)に州城にあった紫泉書院の改修工事が行われた。この事業で中心的な役割を果たしたのは蘇宗經（道光年間舉人、江岸村人）、蘇崇瀾（嘉慶年間舉人、州背村人）、陳第頌（道光年間舉人、泉西塘村人）、梁明焯（拔貢生、荔枝根村人）らであった³⁵⁾。蘇宗經らは紫泉書院の学田増設（道光9年、1829）、鬱林州城壁の修理（道光15年、1835）でもリーダーシップを発揮したが、そのメンバーの中に烏石潭村黎氏の姿は見あたらない³⁶⁾。また鬱林『蘇氏族譜』によると、江岸村蘇氏は蘇宗經の曾祖父である蘇季槐（恩貢生）が福綿村唐氏の女性を妻に娶り、祖父蘇其焯（雍正年間進士）は硃砂村蔣氏、父蘇懿誠は州南門楊氏から妻を迎えた。だが蘇宗經の兄弟や子供たちに烏石潭村黎氏と通婚した形跡は確認できない³⁷⁾。

さらに檔案史料によると、道光15年(1835)に鬱林州城壁の修理が完成した後、監生の鄧世琦、陳孔甞（共に監生）らは知州王彦和が「士民に勸派」したと訴えた。広西巡撫惠吉の調査によれば、鬱林州城の修理費は銀42,000両かかり、紫泉書院に総局を設置して各郷に寄付を募った。経理を担当した蘇宗經らは「10石の小作料を受けとっている者は銀2両を寄付し、小作料が100石の者は銀200両を納め、以後小作料の数に応じて寄付の金額を決める」とあるように、州内の地主たちに寄付を割り当てることにした。

鄧世琦の伯父である鄧秀芝（監生）は多額の寄付を行った者が表彰されると聞き、銀2,000両の寄付を申し出たが、247両を納めたところで死去した。すると鄧世琦らは子供が幼いことを理由に寄付を辞退しようとしたが、「各捐戸は不服で、寄付を申し出ておきなが

ら辞退すべきではないと議論が百出」した。

また「家道は豊厚」だった陳孔甡は父親のために銀 500 両の寄付を行い、後に 1,000 両を追加申請して知州王彦和から表彰を受けた。だが金を工面出来なかった彼は知州が寄付を強要したと訴えることで寄付を免れようとした。さらに滞納した税を取り立てられたことで知州に恨みを持っていた陳第誦（挙人）は、寄付をしていなかった民人黎庭超ら 24 名と共に「端境期で民力に困難がある」ことを理由に省政府へ訴えた。

結局鄧世琦らは事実に基づかない訴訟を起こした罪で処罰を受けた³⁸⁾が、この事件は政治的なイニシアティブを握った科挙エリートの対極に、挙人や監生など一定のタイトルを持ちながら、地域リーダーの隊列に加わることの出来ない人々がいたことを伝えている。黎開紹兄弟もこうした階層の出身であったと推測され、彼らは自分たちを権威づけるもう 1 つの価値として天地会を選んだと考えられるのである。

いっぽう [23] の灌陽県では蔣五益らが天地会に入ると、同族で生員の蔣彩玉らは地元出身の大官である卿祖培に「寒門の不幸であるが、族内に匪類が生まれた。蔣五益、蔣沐璽はあえて度々〔匪賊を〕招き匿い、県内に住む良家の子を誘ったり脅したりしている」と訴えた。その手紙によると入会を強要されたのは陳儒政、胡文星の 2 人で、会員の曹常済に騙されて蔣五益の家に連れこまれた。部屋には 30 人ほどの人間がおり、刀を交叉させた 3 つの門をくぐると、奥に大哥となった蔣世現が座っていた。そして 2 人は蔣世現を大哥として認めるかを尋ねられた後、その命令に従うように命じられたという³⁹⁾。

灌陽県の蔣氏は多くの科挙合格者を生んだ有力宗族で、道光『灌陽県志』の編纂には蔣柄（挙人）、蔣如琳（挙人）、蔣宏懋（廩生）などが参加した⁴⁰⁾。だが人口が多いために分節ごとの政治、経済的力量には大きな差があり、エリートを中心とする族内統合の中で庇護を得られない貧困層もいた。天地会はこうした下層成員の要求に応える擬制家族としての側面を持っており、入会者が父母の命令ではなく、みずからの意志によって来たことを誓わせるなど、現実の親族関係を相対化させるものだった。

また蔣五益らの結成した天地会は「あるいは書役や兵丁と結び」という言葉通り、灌陽県差役の王立、伍茂、塘兵の王繼隴が参加していた。この事実が発覚すると、処分を恐れた知県の王洱らは、彼らが入会した事実については伏せたまま「不法悖逆の事実はない」結拜兄弟の事件として報告を行った。その後も伍茂が逮捕されないことに苛立った蔣彩玉らは、地方官が事件の目も消しを図っていると訴えたため、この事件は天地会の政治的な影響力が下層役人に及んだ例として注目を集めた⁴¹⁾。

すでに多くの論者が指摘しているように、初期の天地会に政治性はむしろ希薄であった。『西魯序』に代表される危険な言説も、彼らの政治的目標を示すというよりは、自らを非会員から差異づけ、メンバーの結束を高めるための大義名分に過ぎなかった⁴²⁾。例えば [16] の黄世可は自分の息子に朱姓を名乗らせて「明朝の後裔」とし、[18] の尹之屏は「天に替わって道を行う」「掃清胡北して王公を助けん」などと記した「悖逆」の歌訣を作った。だが

それらは「人を容易に惹きつけ、多くの銭を出させることが出来る」「デタラメな歌を作り、新しい様子に変えれば、これによって愚民を欺き、人々を惑わして銭を騙し取ることが出来る」と考えた⁴³⁾という供述が示すように、それ自体は決して彼らが天地会を結成した目的ではなかった。

ただし内容がどれほど虚構であっても、一度語られた政治的言説が人々の思考や行動を規定したのも事実であった。例えば [15] の李遇恩（元監生）は「真人が四川辺りに出づる」「辛未年の冬に天運が転動する」といった話を聞かされ、元武生の藍輝彩と蜂起の計画を立てた。また [1] の馮老四は初め「財物を搶掠」する目的で天地会を結成したが、やがて行動は武装蜂起へとエスカレートし、官軍や練勇と交戦した⁴⁴⁾。清朝が天地会の摘発に執拗に取り組み、その犯人を「天地会復興」の罪で厳しく処罰したのは、本来は参加者のアウトロー的な心情を吐露したに過ぎなかった「反清」スローガンが一人歩きし、それに見合う現実を生み出してしまう危険を察知していたためと考えられる。

さらに清朝の天地会に対する弾圧は、地方レベルの利害対立や政治的リーダーシップをめぐる競争を続けていた人々に、他人を攻撃する格好の題材を提供した。以下では南寧府横州、柳州来賓県で発生した誣告事件を検討したい。

【ケース 4】横州韋立松の「悖逆」掲帖作成事件（道光 18 年、1838 年）⁴⁵⁾：この年 7 月に南寧府城外で「虎威大將軍」の黃充、「州差総督」の林有という名を記した掲帖が張り出された。その内容は「兵が到着する日に文武の官は武器を棄てて投降し、慌ててはならぬ」と命じたもので、「順興」の年号を用い、「南京総鎮正堂」としてした「偽印」が押されていた。掲帖中にあった地名が横州に実在し、黃充、林有も横州の差役であることが判明したため、2 人を呼び出して尋問したところ、彼らと対立関係にあった韋立松（武生）が誣告を目的として作成したことが明らかになった。

両広総督鄧廷楨らの報告によれば、韋立松は「性格が強横」で、黃充はかつて韋立松の田を小作したが、韋立松が必要経費を払わなかったため訴訟となって対立した。また林有が韋立松の族弟である韋自新（生員）の租税滞納を追求すると、韋立松は一族のメンツを潰されたと考えて恨んだ。道光 17 年 (1837) に横州陳山村の方亜盛四らが結拜兄弟を行って摘発されると、韋立松は村人を訴えて金をゆすり取ろうと考えた。そこで匿名の掲帖を作成したが、この時黃充、林有の名前を書き込んだ。掲帖を張り出した韋立松は陳山村の方亜考を訪ね、天地会員ではないことを保障する報酬として銀 20 両を出すように迫った。また他の村人を恐喝しようとしていたところを捕らえられた。

【ケース 5】来賓県盧文猷による「聚衆結拜」の誣告事件（道光 21 年、1841 年）⁴⁶⁾：来賓県の盧文猷、張鴻綸は盧遵魁と田の水を争って仲が悪かった。この年 7 月に盧遵魁が仲間と関帝廟で「酬神飲酒」すると、これを見た盧文猷は「聚衆結拜」ではないかと疑い、監生張漢彪、団長雷洗華と相談して来賓県へ訴えた。取調べの結果「結拜」の事実はなかったが、盧遵魁らは酒に酔ってもめ事を起こしてはならぬと知県の叱責を受けた。

翌 22 年 (1842) 8 月に盧遵魁は山で盧文猷と遭遇し、誣告したことを非難した。盧文猷が言い返したために争いとなり、盧遵魁は芝刈りの刀で盧文猷を負傷させた。その後盧文猷が死去すると、張漢彪は盧遵魁と争いの場に居あわせた古士超親子を「主匪」とであると告発した。だが彼らに結拝儀礼を行った証拠が見あたらなかったため、張漢彪は黄動観の家に隠れて役所の出頭命令に応じなかった。

この事実を知った陳賁は張漢彪を捕まえようと黄動観の家に至ったが、黄動観の子である黄東川に殺された。また黄東川を捜索していた差役李宣は古士超を伴って張鴻賁（黄東川の親戚）の家に至り、張鴻賁を殺害のうえ牛 2 匹を奪った。復命した李宣は張鴻賁が犯人を匿って抵抗したと報告したが、張漢彪は古士超らの殺人事件を知県がもみ消そうとしていると両広総督衙門へ訴えた。取調べの結果古士超は死罪、李宣は辺境へ流刑となり、盧遵魁と張漢彪は笞打ちの刑になった。

【考察】これらは天地会や結拝兄弟に対する禁令を利用した誣告事件であり、そのきっかけは小作に必要な経費の不払い、水争いといった地域社会にありがちなトラブルに過ぎない。だが韋立松は天地会員を生んだ村人を恐喝しようと図り、盧文猷は廟に集まって「酬神飲酒」をした盧遵魁が結拝儀礼を行ったのではないかと疑って告発した。それらは結拝兄弟が移民社会に深く定着した慣行であったことを物語る。また誣告にあたって反逆の文書や旗を作成することは、台湾でも屡々見られた現象であったが、天地会がその実態の如何に関わりなく、周囲の非会員から異端の政治勢力と見なされていたことを示唆している。後に洪秀全は天地会（三合会）を「反清復明」をめざす政治的秘密結社として評価したが⁴⁷⁾、こうした天地会イメージは王朝政府と地域社会——とりわけ定住民の視線——の共犯関係によって生み出された「作られた伝統」であったと言える。

3. 19 世紀前半の広西における「盗匪」の活動とその影響

かつて「人々は淳樸」で統治し易いなどと評された広西も、19 世紀に入ると天地会と並んで「盗匪」即ち結拝儀礼を必ずしも行わない盗賊集団の活動が盛んとなった。光緒『貴県志』は県内における盗賊横行の原因について、次のような記載を残している。

盗賊の起こりは、道光年間に始まった。署県令の王済が県北の隴頭、六班諸山の銀鉞を開き、狹人を招いたが、五方〔の人々〕が雑じっていたため、善悪の区別がつかなかった。鉞山を掘って利益を得た者は 1 ヶ所に落ち着かず、損をした者は昼間賭博場を開設し、夜になると密かに出でて賊となった。焼香して拝会するなど様々な不法を行った。もし賢い知県が早いうちに駆逐していれば、盗賊の風潮を止めることが出来たであろう。だが王知県の後任として再任した楊曾恵は、隨行の幕僚に三々五々群をなして、納税を督促し赤字を穴埋めさせることしか考えず、盗賊については放ったらかしで関知しようとしなかった……。賊たちは恐れ憚ることがなくなった。⁴⁸⁾

ここでは鉞山開発の労働力として入植した移民のうち、成功を収められなかった者たちが賭博や窃盗などの反社会的な活動に手を染めたこと、地方官が徴税以外の問題に関心を払わず、盗賊の取締りを怠ったために、彼らの活動が盛んになったと指摘している。移民の流入と地方政府の統治力不足は広西全体で見られた傾向であり、広西巡撫恩長は「會匪と盗賊を捕らえることが今日の第一の要務である」⁴⁹⁾と述べたうえで、水路の警備や保甲の強化、禁令の周知徹底を行うように求めた。また広西巡撫趙慎畛も「粵西は嘉慶十二年(1807)に広東で洋匪が弾圧された後、内河の土盗が密かに西省へ至り、山に住んで耕作をしている各省の游民と徒党を組んで掠奪を働いており、地元の愚民を仲間に入れている」とあるように、広東の海上で活動していた「洋匪」の弾圧後、広西へ入り込んだ盗賊たちが移民や地元出身の下層民と共に活動していると分析した。そして嘉慶25年(1820)の段階で処罰した「盗匪と會匪」は1,200名に上ると報告している⁵⁰⁾。

それでは実態はどうであろうか。**【表2】**は嘉慶、道光年間の広西で摘発を受けた「盗匪」の活動をまとめたものである。また道光年間には「続獲積年搶劫及結拜兄弟旧案逸犯」即ち過去に発生した強盗や結拜兄弟事件の逃亡犯について、逮捕者数と処罰内容を定期的に報告することが義務づけられ、その数は道光28年(1848)4月の段階(第31次)で813名に及んだ⁵¹⁾。これらの史料を見る限り、広西における「盗匪」の活動は嘉慶年間に1つのピークを迎え、道光年間に入ると一時的に件数が減少した。むろんこの時期の史料には遺漏も多く、新たな事件が皆無だったとは考えられないが、道光13年(1833)に広西巡撫だった祁墳が「粵西の盗風は前に比べて少なくなった」⁵²⁾と指摘したのはその影響と見られる。しかしアヘン戦争前後から再び増加に転じ、とくに道光26年(1846)には多くの事件が報告されている。

これらの事件の参加者は、言うまでもなく圧倒的多数が「貧難」「窮苦」な下層民であった。その職業について見ると、[ロ]の陳木光らは「種山」即ち山の開墾に従事し、[ヌ]の官師目、[カ]の呉恒二、[ヨ]の雷晩、[タ]の李亜都、[ソ]の羅老相、[ラ]の陳倡会、[ム]の覃汝魁、[オ]の黄老十らは「耕傭」「傭工」「傭趁」の小作人や雇われ人であった。また[ハ]の梁貴生、[ホ]の呉老二、[ナ]の謝亜七、[キ]の邱亜新らは「肩挑貿易」「挑壳篋貨」「小貿易」の小商人であり、[ル]の曾保榮らは「駕船」の船乗り、[レ]の劉老五は「裁縫」の手工業者、[マ]の玉士華らは兵役、[ラ]の楊老六は「求乞」の乞食とその職業は様々であった。さらに[ク]の韋老添らが「傭工小貿駕船耕種手藝」、[マ]の李法受らが「小貿傭工種地撐船」とあるように、1つのグループ内でも職業は一定しなかった。彼らは旧知の仲であるか、市場で知り合って犯行を計画したケースが目立つが、下層民が生計の道を求めて雑多な事業に取り組んでいたことを良く伝えている。

次に参加者の出身地を見ると、これも当然ながら移民、広西出身者の双方が見られる。うち移民については[ホ]の呉老二、陳高士、[ト]の曾志七、周亜亨、[ク]の蘇亜養、[マ]の玉士華、朱得勝などが広東人で、[ヲ]の謝二、[ネ]の何榮は広東省内の高要県、[ツ]

表2 嘉慶・道光年間の広西における「盗匪」の活動

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
イ	嘉慶12年 (1807)	平南県	◎黃亜八(桂平県人)は「貧難」から蕭亜六に従い、31名で羅得時(広東南海県人)の客船を相思州にて襲撃した。客船の乗組員や客が抵抗したため、黄亜八は竹銃を放って1人を負傷させた。黄亜八は斬首に処せられた。	成林奏、 反清項 8949-13号
ロ	嘉慶12年 (1807)	岑溪県	◎陳木光、周全賢、李如森(共に岑溪県人)は「種山度日」していたが、「貧苦」から5人で隣人のいない袁品才の家を襲った。陳木光らは室内に入り、袁品才を負傷(のち死去)させ、銅銭や衣物を奪った。袁品才に致命傷を負わせた李如森はさらし首となり、陳木光、周全賢も処刑された。	『宮中檔嘉 慶朝奏摺』 23輯、264頁
ハ	嘉慶13年 (1808)	龍州 ヴェトナム	◎梁貴生(龍州人)、何香(憑祥土州人)らは「肩挑貿易」をしていたが、ヴェトナムで蘆葉を売ろうと考え、下凍土州から非合法に越境した。叫寨村の「夷人」儀美の家に泊まった梁貴生らは、儀美らと10名で谷旺村の黃珍勝の家を襲い、1人を殺害して牛や物を奪った。清朝官吏に捕らえられた梁貴生は強盗の罪で死罪となり、死体はヴェトナムに引き渡されてさらし首となった。	『宮中檔嘉 慶朝奏摺』 20輯、274頁
ニ	嘉慶13年 (1808)	博白県	◎朱亜大と彼に短工として雇われていた陳泥鯁七(共に博白県人)は「貧苦」で、劉亜七ら9人で隣人のいない宋宇寧の家を襲うことにした。朱亜大らは家に押し入り、宋宇寧の母を傷つけ、部屋を物色し牛を奪った。また宋宇寧の妻など女性3名に暴行を加えた。朱亜大、陳泥鯁七らはさらし首となった。	『宮中檔嘉 慶朝奏摺』 21輯、365頁
ホ	嘉慶13年 (1808)	思恩県	◎呉老二(広東人)は思恩県三墟で「挑売篋貨」をしていたが、陳高士(広東人)、李爛子(湖南人)と「貧難」について語り、6人で譚頭村に年配親子2人で暮らしている盧徳の家を襲うことにした。譚頭村についた呉老二は盧徳の父親盧紹環に泊めてほしいと願い、夜中に李爛子らを室内に導き入れた。彼らは盧紹環を殺害し、首飾りや衣服などを強奪した。捕らえられた呉老二、李爛子はさらし首となり、外で見張りをしていた陳高士も死刑となった。	『宮中檔嘉 慶朝奏摺』 21輯、843頁
ヘ	嘉慶13年 (1808)	容 県	◎張日華、駱老晩(共に容県人)はこの年11月に韋老六に従い、40名で添弟会(天地会)を結拜した。彼らは黎樹を大哥、韋老六を師傅として、刀下をくぐる儀礼を行った。12月に張日華、駱老晩は天地会員の林木水に従い、8人で陳得富の金を奪った。また張日華は嘉慶16年末(1812年1月)に董湖基と練石秀に従い、2度にわたり窃盗を行った。張日華は「復興天地会」の罪によってさらし首となり、駱老晩も絞首刑になった。	『宮中檔嘉 慶朝奏摺』 31輯、413頁
ト	嘉慶15年 (1810)	貴 県 横 州 宣化県 上林県 興隆司	◎曾志七(広東人)は嘉慶6年(1801)に窃盗の罪で服役したが、釈放後の15年6月に朱亜三に従い、39名で貴県瓦塘にて客船を襲った。また12月には游亜鍾に従い、21名で横州にて平樂協の捕船を襲撃した。さらに曾志七は嘉慶16年(1811)5月に陳安幅(横州人)ら23名を集め、宣化県で客船を襲った。また周亜亨(広東人)は嘉慶15年(1810)4月に覃志晩に従い、23名で上林県の武生蘇飄の家を襲撃した。16年5月に周亜亨は曾志七、陳安幅ら22名を集めて武縁県興隆土司の羅彦章の家を襲った。さらに張亜勤、李亜四(共に広東人)は宣化県、武縁県で強盗事件に加わった。曾志七、周亜亨らは死刑となった。	成林奏、 反清項 8949-11号
チ	嘉慶17年 (1812)	宣化県	◎黃庭邦(広東靈山県人)は知り合いである曾庭榮から、弟の曾庭相が天地会参加の罪によって宣化県の三官司巡檢に捕らえられており、衙署を襲撃して弟を奪回し、掠奪を行うのを手伝って欲しいと張元達を通じて頼まれた。2月に黃庭邦は曾庭榮、張元達ら39名で巡檢衙門へ至り、中へ侵入したが、曾庭相はすでに県衙門へ連行されていたため救出できなかった。彼らは	慶保 『粵撫奏稿』 卷8

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			巡検張紹宗らを負傷させ、巡検の印と金品を奪って逃走した。曾庭榮ら 25 名は捕らえられて処刑され、黃庭邦も「強盜打劫衙門」の罪によってさらし首となった。	
リ	嘉慶 18 年 (1813)	岑溪県 蒼梧県 藤 県	◎黃輝章（岑溪県人）はこの年 3 月に蒙見珍ら 15 名で呉金彩の家を襲い、呉金彩夫妻を負傷させて金品を奪った。黃輝章は嘉慶 15 年 (1810) にも仲間 21 名に従って蒼梧県の阮裔祺の家を襲い、17 年 (1812) には仲間 3 名に従って黄金鼎の幼女を誘拐した。また同年 11 月には広東西寧県で牛を盗んだ。さらに 18 年 (1813) 3 月に黃輝章は仲間 7 名を率いて武生巖邦の牛を盗み、4 月には梁起任に従って 40 名で添弟会を結拜した。そして同年末から 2 度、藤県などで窃盗を行った。捕らえられた黃輝章はさらし首となった。	『宮中檔嘉慶朝奏摺』 31 輯、406 頁
ヌ	嘉慶 18 年 (1813)	合浦県 (広東) 博白県	◎官師目（博白県人）は広東合浦県で「傭工」をしていたが、潘元進らと「貧難」について語り、14 人で財産のある呂仕才の家を襲うことにした。官師目は室内に入り、金品を奪って逃走した。潘元進らは間もなく逮捕されたが、官師目は興業県へ逃亡し、道光 5 年 (1825) になってようやく逮捕された。また尋問の結果、官師目は嘉慶 7 年 (1802) と嘉慶 16 年 (1811)、20 年 (1815) にも博白県、合浦県で窃盗を働いていた事実が発覚した。官師目はさらし首となった。	蘇成額奏、 軍機檔 54132 号
ル	嘉慶 19 年 (1814)	桂平県	◎曾保榮は關亜十ら 3 名と「駕船生理」していた。この年 3 月に朱勝茂らが広東江で曾保榮の船を訪ね、「貧難」を語っていたところ、曾保榮が凌雲県の地丁銀を輸送する餉船が停泊しているのを見つけ、掠奪することにした。曾保榮ら 14 名は人気のない盤石塘で船を襲撃し、兵役周文らを負傷させて銀 1,600 両を強奪した。通報を受けた桂平県知県富長は曾保榮ら 10 名を捕らえたが、曾保榮は桂林へ護送する途中に船が転覆して溺死した。また朱勝茂ら 4 名は嘉慶 17 年 (1812) から広東南海県、貴県で當舖や客船を襲撃していたことが判明し、さらし首となった。	『宮中檔嘉慶朝奏摺』 27 輯、289 頁
ヲ	嘉慶 20 年 (1815)	隆安県 蒼梧県	◎謝二（広東高要県人）は嘉慶 15 年 (1810) に広東四会県で 42 名の仲間と當舖を襲撃し、高要県では客民鄧広彦の金を奪い、劉天福の妾を奪って妻とした。捜査の手を逃れて広西隆安県へ至った謝二は 17 年 (1812) 4 月に大眼二に従い、25 人で顔得盛の船を襲った。 嘉慶 18 年 (1813) に謝二は広東へ戻り、高要県で盗みを働いた後に南海県で捕らえられたが、広西へ護送される途中に藤県で鎖を切って逃走した。その後謝二は広東で潜伏していたが、嘉慶 20 年 (1815) 5 月に再び蒼梧県へ至ったところを藤県の差役に発見され、抵抗の末に捕らえられた。謝二は強盜殺人の罪でさらし首となった。	『宮中檔嘉慶朝奏摺』 33 輯、786 頁
ワ	道光 3 年 (1823)	藤 県	◎莫亞四（藤県人）は道光 2 年 (1822) 8 月に薛富通らと「窮苦」について話し合い、李湖組、羅瑞南が「販売木植」した代金を奪うことにした。彼らは 7 人で李湖組らを襲い、金を奪って逃走したが、間もなく薛富通は捕らえられ、莫亞四は陳其全の家などに潜伏した。 道光 3 年 (1823) に莫可隴、吳明光、吳明達は線目（スパイ）となって犯人の捜査に協力した。これを知った莫亞四は怒り、陳其全、陳矮子二、莫可信らと莫可隴の殺害を図った。12 月に莫亞四ら 6 名は車碑桶で莫可隴らを待ち伏せ、刀で彼らを殺害した。莫亞四はこの年末に謝亜二に従い、16 人で永安州の雜貨店を襲った。また陳矮子二、莫可信は嘉慶 25 年 (1820) から藤県で発生した 3 度の強盜事件に加わっていたことが判明した。莫亞四はさらし首、陳矮子二、莫可信は斬首、陳其全は絞首刑となった。	康紹鏞 『奏稿』

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
カ	道光 4 年 (1824)	寧明州	◎呉恒二、黄恒太、何恒記は土恩州の「土人」で、「耕傭」して暮らしていた。この年 3 月に呉恒二は何志昌と相談し、13 人で金持ちである王玉賢の家を襲うことにした。彼らは室内に入り、金品を奪ったが、やがて 3 人は寧明州によって捕らえられた。8 月に呉恒二は獄卒が眠っている隙をつき、黄恒太、何恒記と共に監獄から脱走した。3 日後に呉恒二、黄恒太は捕らえられて死刑となり、彼らの家族も「土人」の例にならって移住させられた。	康紹鏞 『奏稿』
ヨ	道光 15 年 (1835)	馬平県 荔浦県	◎雷晩（馬平県人）は「傭工」で暮らしていたが、道光 13 年 (1833) 12 月に銀老棒らと会い、「窮苦」から 17 人で「家道殷実」である陳元熙（挙人）の家を襲うことにした。雷晩らは室内へ入り、雇工の李老受を負傷させ、金品を奪った。また雷晩は道光 14 年 (1834) にも潘老晩、韋晩に従って荔浦県で 2 度盗みを働いた。 道光 15 年 (1835) に雷晩は捕らえられ、馬平県へ護送されることになったが、途中雒容県で収監された晩に県衙門の倉神廟が火事となった。雷晩は混乱に乗じて脱走したが、3 ヶ月後に捕らえられて処刑された。	恵吉奏、 軍機檔 70446 号
タ	道光 16 年 (1836)	荔浦県	◎李亜都、鄭亜鉄（共に福建人）は荔浦県で「傭工」をしていたが、この年 5 月に彼らは「貧苦」から 3 人で楊樹林の牛を盗もうと考えた。そこで夜に楊樹林の家に行き、牛を連れ出したが、楊樹林と弟の楊栢林が逃げ遅れた李亜都と争いになり、2 人共に刀で刺し殺された。捕らえられた李亜都は処刑され、鄭亜鉄も枷と鞭打ちの刑になった。	『宮中檔道光朝奏摺』 2 輯、5 頁
レ	道光 16 年 (1836)	土田州	◎劉老五は土田州で「裁縫」をして暮らしていたが、この年 9 月に凌玉潮と「貧苦」について語り、「家道殷実」の黄映璠の家を襲うことにした。彼らは黄映璠の「工人」である黄亜四など 11 人を集め、黄映璠の家に侵入して金品を奪った。事件の通報を受けた代理土知州岑銘が捜査を進めると、劉老五らは自首し、思恩府と百色廳で取調べを受けることになった。17 年 3 月に上林県から土田州へ連行される途中、劉老五らは護送役人の隙を見て逃走した。その後捕らえられた劉老五は極辺の地へ流刑となった。また護送役人の土目黄有謨らも処罰を受けた。	『宮中檔道光朝奏摺』 6 輯、83 頁
ソ	道光 19 年 (1839)	修仁県	◎羅老相（修仁県人）は「傭工」をして暮らしていたが、この年 3 月に蒙老晩と「貧苦」について語り、「家道殷実」であった李扶望の家を襲うことにした。2 人は屋内に入ったが、李扶望夫妻の抵抗を受けてこれを殺害した。捕らえられた羅老相はさらし首となった。	『宮中檔道光朝奏摺』 7 輯、97 頁
ツ	道光 19 年 (1839)	百色庁	◎関九興（広東南海県人）は嘉慶 11 年 (1806) に強盗事件に加わり、湖南へ流刑となった。だが 13 年 (1808) に脱走し、広西の辺境地帯に潜伏した。道光 8 年 (1828) に関九興は陳単眼彪らと「貧苦」について語り、百色廳の平馬河は客船や商人が多いので、ここに「更館（関所）」を設けて船を捜索し、アヘンを見つけたら奪って転売しようと提案した。 そこで関九興ら 19 名は「聯義堂」の印鑑を作り、客船に対して「奉官捜査」を偽って検問を行った。没収したアヘンは関所へ持ち帰り、「関烟」の名目を立てて「合法的（可保無人查拏）」なアヘンとして販売した。またアヘンが貯まると、鎮安府や雲南へ運んで 1 斤当たり 7 両から 11 両で売りさばいた。またアヘンが見つからなかった船や商店からは 20 文から 360 文の「更銭」を徴収した。 道光 10 年 (1830) に百色廳が捜査に乗り出すと、関九興は関所を閉めて逃亡した。19 年 (1839) に関九興が陽萬土州に戻って様子を窺ったところ、「線人（密偵）」に発見されて捜索を受けた。捕らえられた関九興はアヘンを奪って売りさばいたこと	『林則徐全集』 3、1463 頁

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			は認めたが、御史賈臻が告発したように数千人を率いて「劫奪殺人」した事実はないと供述した。関九興はアヘン密売の罪によって絞首刑となった。	
ネ	道光 19 年 (1839)	宣化県 桂平県 広 東	<p>◎何榮（広東高要県人）は度々事件を犯し、捜査を逃れて広西宣化、桂平県へ潜伏して、改名のうえ「傭工」していた。道光 19 年 (1839) 6 月に何榮は梁北帯ら 11 人に従い、宣化県で広東即用知県李延福の家族が乗った船を襲い、金品を奪った。また 7 月には広東封川県で黄幅勝ら 17 人と汪瑞綸の船を襲撃した。さらに 11 月には高要県で黄幅勝ら 19 人と開建營兵丁梁致升らの船を襲い、金品を奪ったうえ船に放火し、1 人を焼死させた。</p> <p>これに先だって何榮は、道光 18 年 (1838) に広東徳慶州で 2 度の窃盗事件を起こした。また 9 月には何江らと 12 名で船を雇って広西桂平県大黃江へ至り、「更夫」になろうとして村人と争い、桂平県の搜索を受けて逃走した。その後高要県で 2 度の盗みを働いた何榮は、19 年 (1839) 3 月に黄幅勝ら 11 名と桂平県大洋坪に住む湯亜年の家に至り、賭博を行った。そこへ「巡緝盗匪」していた広東の差役蔡金らが踏みこんだが、何榮らは抵抗して蔡金らを負傷させた。加えて広東へ逃げた何榮は広東で 2 度の強盗事件を起こした。捕らえられた何榮らは「粵東内河盜劫之案、行劫三次以上應行斬決者、加以梟示、恭請王命先行正法」という法令によって即刻さらし首となった。</p>	『林則徐全集』 3、1609 頁
ナ	道光 21 年 (1841)	貴 県	<p>◎謝亜七（鬱林州人）、文五（広東合浦県人）、藍三（陸川県人）は貴県で「肩挑」によって生計を立てていた。この年 9 月に彼らは「窮苦」を語り合い、通行人を襲って物を奪うことにした。彼らが 4 人で林の中に潜んでいると、鬱林州の客民である陳石能が叔父陳金章親子と共に通りかかった。謝亜七らが金品を入れた布袋を奪って逃走すると、陳石能が捕らえようとしたため、謝亜七は陳石能を負傷させた。陳石能は 2 週間後に死去した。</p> <p>貴県知県の楊曾恵は事件を聞きつけたが、詳細が不明であったため、広西省の「3 日以内に報告」という規定に従わなかった。陳石能の死後、通報を受けて捜査が開始され、楊曾恵は「撤任留緝」の処分を受けた。その後謝亜七らは捕らえられ、斬首および労役刑となった。</p>	『宮中檔道光朝奏摺』 10 輯、651 頁
ラ	道光 21 年 (1841)	龍勝庁	<p>◎陳倡会、楊洗潮ら 4 人（共に湖南人）は龍勝で「耕傭」を、楊老六（龍勝人）は乞食をして生活していた。この年 7 月に陳倡会らは「貧難」について語り、辺鄙な場所にある袁章華の家を 6 人で襲った。彼らは室内に入り、金品を奪って逃げた。また陳倡会と楊老六は 22 年 (1842) 9 月にも曾老晩に従い、4 人で陳明才の家を襲った。捕らえられた陳倡会、楊老六は斬首された。</p>	『宮中檔道光朝奏摺』 12 輯、540 頁
ム	道光 21 年 (1841)	昭平県	<p>◎覃汝魁、覃英魁兄弟（藤県人）は「耕傭」で生活していたが、11 月に昭平県の市場で潘亜佑らと会い、「窮苦」から 17 人で客船を襲撃することにした。彼らは富約河口で署上林県の夏允頤の船を襲い、銀物を奪った。塘兵や村人が駆けつけると覃汝魁らは船を棄てて逃げたが、兵役によって捕らえられ、昭平県の監獄に入れられた。22 年 (1842) 4 月夜、覃汝魁らは悪天候に乗じて監獄から脱走したが、兵役に再び捕らえられた。覃汝魁は即刻処刑された。</p>	『宮中檔道光朝奏摺』 13 輯、588 頁
ウ	道光 24 年 (1844)	来賓県 象 州	<p>◎楊宝受（来賓県人）と余老四、羅老二（共に広東長寧県人）は道光 23 年 (1843) 11 月から翌年 1 月にかけて、それぞれ来賓県、象州、柳城県で窃盗事件を起こし、捕らえられて取調べを受けた。24 年 (1844) 9 月に楊宝受らは悪天候に乗じて、馬平県の監獄から脱走を図った。楊宝受、余老四はすぐに兵役に取り押さえられ、羅老二も翌日再逮捕された。楊宝受はその後監</p>	『宮中檔道光朝奏摺』 14 輯、501 頁

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			獄で病死し、余老四らは処刑された。脱走を許した馬平県典史潘恩義らも処罰された。	
キ	道光 25 年 (1845)	土田州	<p>◎邱亜新（福建人）は土田州で「小貿易」をしていたが、道光 23 年（1843）に陳桂から銭 2,000 文を 3 分の利息で借りた。返済に困った邱亜新は耕地を抵当に入れたため、新たに借金をすることが出来なくなり、陳桂を恨んだ。</p> <p>25 年（1845）2 月に邱亜新は黄老二に事情を話したが、黄老二も陳桂が「刻薄」で金を貸してくれなかったことを恨んでいたため、家を焼き討ちして報復することにした。邱亜新は盧自紅、李老大（宣化県人）、劉三苟（広東人）ら 8 名で陳桂の家を襲い、物色のうえ屋敷に火をつけた。陳桂とその家族 5 人は逃げ場を失って焼死し、捕らえられた邱亜新はさらし首となった。</p>	『宮中檔道光朝奏摺』 18 輯、327 頁
ノ	道光 26 年 (1846)	蒼梧県	◎この年 8 月に楊甫剛は到水地方に泊まっていた譚善訓の船にアヘンが積まれていることを知り、張得標ら 15 名を集めて官船を偽り、掠奪を行おうと考えた。彼らは船の上に「奉憲巡查」の旗を掲げ、譚善訓の船に乗り込んで、アヘンを奪って逃走した。客と船員が追いかけると、楊甫剛らは沈長迎ら 3 名を殺害した。通報を受けた署知県陳慶桂は潘亞恩ら 7 名を捕らえてアヘンを押収したが、解任のうえ楊甫剛らの搜索を命じられた。	鄭祖琛奏、 軍機檔 77466 号
オ	道光 26 年 (1846)	武縁県	◎黄老十、黄日進、盧特炳（共に武縁県人）は「傭趁」で生活していたが、6 月に「貧難」を理由に 7 人で鄧有典の牛を奪うことにした。彼らは鄧有典の牧場に至り、牛飼いの少年を脅して牛 7 匹を奪った。知らせを受けた鄧有典らが追いかけると、黄老十は鄧有典の父親など 2 名を殺害した。捕らえられた黄老十はさらし首となり、通報が遅れた署知県の郭潤も解任処分を受けた。	『宮中檔道光朝奏摺』 19 輯、824 頁
ク	道光 26 年 (1846)	来賓県	<p>◎韋老添（来賓県人）、蘇亜養（広東人）、盧老柴（馬平県人）、彭三（桂平県人）、蕭成（象州人）らは「傭工小貿駕船耕種手藝」をして暮らしていたが、7 月に胡日秋が 31 人で大湾墟の嗣昌當、誠昌當を襲撃するのに加わった。</p> <p>胡日秋は 2 つの質屋が堅固な造りであり、襲撃は難しいと考え、初めに仲間を屋敷の中に潜入させ、内側から扉を開けさせた。2 つの店に押し入った彼らは、主人を威嚇して金品を強奪した。事件を重く見た清朝は、代理知県の楊培堃に徹底捜査を命じ、17 名を捕らえた。胡日秋は獄中で病死し、韋老添らは死刑に処せられた。</p>	『宮中檔道光朝奏摺』 20 輯、333 頁
ヤ	道光 26 年 (1846)	永康州	<p>◎潘亜頭（隆安県人）、黎亜同（広東南海県人）は「傭工肩挑」で生活していたが、7 月に張亜盛に誘われて都結土州の監生黄愷悌の家を襲うことにした。彼らは「巨盜」の許四（大牛腸、桂平県人）を誘い、43 人で黄愷悌の屋敷に至り、黄添汶（黄愷悌の息子）を殺害して金品を強奪した。また黄愷悌の弟や堂弟ら 4 名を拉致した。</p> <p>張亜盛らは隆安県の帰徳土州に至り、拉致した 4 名を監禁した。また張亜盛らは客船を襲撃しようとしたが、官兵と交戦となり敗北した。また蘇尚基は武縁県で牛を奪って官兵の追撃を受けたが、許四らは壯役の何恒清らを殺害した。捕らえられた潘亜頭、黎亜同は処罰された。</p>	鄭祖琛奏、 軍機檔 79911 号
マ	道光 26 年 (1846)	武宣県	<p>◎玉士華、朱得勝（共に広東人）は武宣県の兵役で、李法受らは「小貿傭工種地撑船」で暮らしていた。この年末に玉士華は「貧難」から客船を襲撃しようと考え、朱得勝などを誘って 18 名で牌樓の川辺に集合した。</p> <p>彼らが船で灯盞潭に至ると、広東から柳州へ交易に向かう林出の船が通りかかった。そこで彼らは船に乗り移り、金品を強</p>	鄭祖琛奏、 軍機檔 80400 号

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			奪して引き揚げようとしたが、林出らは竹銃で玉士華を負傷させた。すると怒った玉士華は船に火を放ち、4人を焼死または溺死させた。 通報を受けた官兵が玉士華らを捕らえたところ、仲間の黄亜朋は他に2度の強奪事件を起こしていたことが判明した。玉士華は兵役でありながら強盗殺人事件を起こした罪でさらし首となり、朱得勝らも死刑に処せられた。	

の関九興、[ヤ]の黎亜同は南海県、[ウ]の余老四、羅老二是長寧県の出身であった。また[ホ]の李爛子、[ラ]の陳倡会、楊洸潮が湖南人、[タ]の李亜都、鄭亜鉄、[斗]の邱亜新は福建人とあるように、地域によっては広東以外の近隣各省からの移民が混じるのも天地会の場合と同様であった。

一方の広西出身者は省内各地に散らばっているが、[ナ]の謝亜七（鬱林州人）、藍三（陸川県人）は出稼ぎ先の貴県で事件を起こした。また[ハ]の梁貴生（龍州人）、何香（憑祥土州人）はヴェトナムで、[ム]の覃汝魁、覃英魁兄弟（藤県人）は昭平県で、[リ]の黄輝章（岑溪県人）は蒼梧県、藤県、広東西寧県で、[ウ]の楊宝受は象州、柳城県でそれぞれ盗みを働くなど、官憲の追及を逃れるという目的もあって細かな移動を行った点が特徴的である。さらに[チ]の黄庭邦（広東靈山県人）、[ナ]の文五（広東合浦県人）も広西に隣接した広東の出身であり、実質的には地元出身者と見なして良いと考えられる。なお「続獲積年搶劫及結拜兄弟旧案逸犯」の報告書にも犯人の原籍地を記した例がある。道光27年(1847)、28年(1848)分の人名リストの内訳は広西人が13例、広東人が8例、貴州人が1例であった⁵³⁾。

続いて彼らが起こした事件の内容について検討したい。**【表2】**を見る限り、嘉慶年間の事例では[ロ][二][ホ]など数名から十数名といった少人数で、辺鄙な場所や年配親子の家を襲撃するケースが多かった。だが次第に30-40名以上を集めるなど人数や規模が拡大し、行動も航行中の船に対する掠奪から市場における典當舖（高利貸）の襲撃などヘエスカレートする傾向が見られた。また[ト]の曾志七、[ネ]の何栄など1人で何回もの犯行に及んだ常習犯や、[ツ]の関九興、[ノ]の楊甫剛のように「奉官捜査」即ちアヘン摘発の地方官を偽って掠奪を行った例が報告されている。

これらは19世紀の広東でも顕著に見られた傾向であり、「粵東の内河における盗劫の事件で、40人以上を集めるか、犯行が3回以上に及んだ犯人で、斬刑に処すべき者は加えてさらし首とする」という規定に従って処罰された事件がしばしば発生した⁵⁴⁾。曾志七、何栄、関九興は何れも広東からの移民であったが、彼らの活動は広東における犯行の手口を持ちこんだものと考えられる。

だがこれらの事件から窺われる一番の特徴とは、道光年間に入って天地会が関与した結拜兄弟および盗難事件が減少し、その影響が殆ど見られないという事実にある。表中で天地会が登場するのは、韋老六に従って「結拜」した[ヘ]の張日華らのケースと、天地会参加の

罪で捕らえられた弟を奪回すべく巡検衙門を襲撃した〔チ〕の2例のみであり、〔ツ〕の関九興が「聯義堂」の堂号を立てたのがその影響を推測させるに過ぎない。これは広西における天地会の活動をまとめた【表1】にも当てはまる傾向で、[26]の博白県の事例では主謀者の朱儉暄が天地会の暗号を知らず、自作の誓詞によって結拝儀礼を行ったが、以後暫く広西では天地会摘発の事例が見あたらない。また「統獲積年搶劫及結拝兄弟旧案逸犯」の報告書に登場する結拝兄弟の逮捕者も李栢青⁵⁵⁾、易家謀⁵⁶⁾、農普添、羅米粉七、黃士繞⁵⁷⁾が確認されるに止まった。

こうした現象が生まれた第一の原因は、清朝政府の厳しい取締りにあった。先の阮元の上奏が「天地会を結成する罪が重いことを知り、老人会などの名前に変えることもある」と述べたように、清朝が結拝兄弟を「天地会の復興」との罪状で厳しく処罰したために、人々は会名の変更のみならず、結拝兄弟という危険な組織形態そのものを避けるようになったのである。だがそれは決して治安の回復や社会の安定を意味しなかった。むしろ移民を含めた下層民が結拝兄弟の相互扶助的機能による危機回避のチャンスを失い、窃盗や強奪などの直接的な行動に訴えざるを得なくなったと考えられる。

筆者はすでに道光年間の台湾における諸反乱について、天地会の影響が希薄であることを指摘したうえで、彼らが天地会の伝統を受けつがなかった代償として提起したスローガンが未熟であり、反乱軍の組織も粗放であったことを指摘した⁵⁸⁾。また同時期の華北で盛んとなったのが捻子（後の捻軍）であったが、これも白蓮教などの民間宗教が伝えてきた救済の言説を受け継がず、むき出しの暴力による生き残りを図ったところに本質があった⁵⁹⁾。つまり嘉慶18年(1813)の天理教反乱が鎮圧されて後、天地会や民間宗教結社に対する摘発が執拗に進められた結果として、19世紀前半の中国下層民衆のあいだでは従来型の結社組織とその理想を欠いた異議申し立てが主流となっていたのである。

ところで清朝の地方政府はこれら「盗匪」の活動にどのように対応したのであろうか？ 光緒『貴州志』の記載では、知県の楊曾恵が強盗事件の取締りに関心を示さず、「賊たちは恐れ憚ることがなくなった」と述べている。だが檔案史料によると、楊曾恵は〔ナ〕の謝亜七らによる「客民」陳石能の殺害事件を3日以内に報告しなかった過失によって、「撤任留緝（解任のうえ引き続き犯人捜査を行う）」という処分を受けた⁶⁰⁾。また時の広西巡撫であった周之琦は「粵西は盗匪が充ち満ちており、屢々前任〔の巡撫〕が厳しく取り締まらせた。私が赴任してからも、各地方の文武に真剣に捜査するよう再三にわたって命じた」と述べており、事実〔ウ〕の陳倡会らによる強盗事件を防げなかった龍勝庁通判梁鳳綸⁶¹⁾、謝亜彩による船の襲撃事件で主犯を捕らえられなかった蒼梧県知県官昕⁶²⁾、岑亜雲ら4名が殺害された強盗事件を報告しなかった西林県知県夏淳鏞⁶³⁾などが同様の処分を受けた。さらに道光3年(1823)に両広総督阮元は、広西官員の給与から余剰の出た銀15万両を商人などに預け、その利息によって得られた金の一部を捜査費用に充てるプランを提起した⁶⁴⁾。これらの措置を見る限り、当時の広西官憲が匪賊の取締りを怠っていたとは必ずしも言えな

い。

だが広西における「盗匪」の活動は、地方官が手持ちの警察力で取締可能な範囲を超えつつあった。ここで楊曾恵の赴任地だった貴県で発生した1つの事件を取りあげたい。

【ケース6】 広東人関亜烏らの客船襲撃と「抗拒官兵」事件（道光22年、1842年）^{65）}：関亜烏は広東人で、この年5月に鄒勝得（広東人）ら55名を率いて貴県独木山の川辺に停泊していた李志光の客船を襲撃し、「貴県、武宣、来賓県の交界地区を往来遊奕」した。また〔ネ〕の何栄の率いる「盗匪」の一員だった楊亜丙、楊亜辛（共に広東人）らは貴県上巖村で女性を拉致し、別に譚順、何組順（広西人）ら29人の集団も隆昌當から銀100両を強奪して、貴県石龍墟一帯に潜伏していた。

関亜烏らが石龍墟に近い鄭世鳳（広西人）らの家に匿われているとの情報を得た貴県知県聞宝桂は、武宣、来賓県の文武官員と共に兵を率いて弾圧に向かった。だが関亜烏は「逮捕に服さず、抵抗を決意」し、楊亜丙らを含む50名余りが官軍に攻撃をしかけた。官兵、壮丁が39名を殺害すると、関亜烏らは逃亡したが、さらに洞窟に隠れていた譚順のグループが抵抗を試みた。関亜烏らはその後も武宣県で掠奪を続けたという。

【考察】 ここで登場する関亜烏らは李觀保（桂平県旧峽村人）、韋三（貴県懷西里人、監生）と共に「広西艇匪の始まり」^{66）}と評すべき集団であった。彼らは最大70名以上の規模をもって黔江流域で活動し、官軍の搜索にも武力で抵抗した。むろん官兵に抵抗した盗賊集団は〔ネ〕の何栄らを初めとして珍しくないが、3県の共同捜査によってようやく鎮圧し、しかも41名を超える死者を出したという点で従来の事件と一線を画していた。

さてこうした現実を前に、広西では科举エリートを中心に保甲を整備して治安の維持を図り、団練を結成して「盗匪」に対抗する動きが始まった。道光元年（1821）に広西巡撫趙慎畛が刊行した『郷約条規』はその一例であり、「望楼を建設させ、規則を発給して互いに見張りをさせると共に、わかりやすい告示を印刷して人々に利害を教える」^{67）}ことを目的とした。また道光15年（1835）には桂平県金田古程村の黄体正（嘉慶年間挙人）が中心となって保甲、郷約組織である安良約が結成された。

この安良約についてはすでに西川喜久子氏^{68）}、稲田清一氏^{69）}、寺田浩明氏^{70）}の研究があり、筆者もそれが黄体正と婚姻、子弟関係を結んだ70名の移民エリートのイニシアティブを明確にしながら、1,206名を超える寄付者に「社約」の「総理」を担当させて、金田一帯の各宗族、村落をその管理下に置こうとするトータルな支配組織であったことを指摘した。またその秩序構築の手法は有力成員の主導権を確立することで、宗族組織の結束を強化した彼ら自身の経験を地域社会の再統合に応用するもので、儒教的規範による民衆教化と「壮丁」の武術訓練、社倉の設置による貧民の救済などを行うものだった^{71）}。だがこうした試みも黄体正の晩年には次のような重大な危機に直面していた。

【ケース7】 桂平県におけるヴェトナム官船襲撃事件（道光23年末、1844年初）^{72）}：新会六は広東人で、陳亜二（広西人）ら共々人に雇われて暮らしていた。この年末にヴェトナム

の官兵が広東から中国船で帰国すると、その船員だった古亜三は積荷の銀を奪おうと考えた。彼は病気を口実に船を降り、新会六を誘って官船の跡を追ったが、掠奪のチャンスを見つけることが出来なかった。1月15日に官船が桂平県の石嘴地方に停泊すると、古亜三、新会六は陳亜二ら69名のメンバーを集めて夜襲をかけ、ヴェトナム兵数名を負傷させて金品を強奪した。また仲間の張亜光、関亜六らは桂平、宣化、武宣県でも船を襲い、4つの事件の被害総額は銀1,020両に及んだ。

【考察】この事件は人数の規模や被害額の大きさもさることながら、外国官兵の護送船が襲撃されて負傷者を出し、清朝のメンツを失わせた点で衝撃的な事件であった。清朝は事件を未然に防げず、正確な報告を行わなかった署桂平県知県袁湛業を「国体を顧みず、故意に曖昧な報告をするとは憎むべきことこの上ない」と非難して罷免したが、この袁湛業こそは黄体正のよき理解者として桂平県の団練結成を積極的に進めた人物であった⁷³⁾。黄体正「里中紀事八首」は「署県袁公（袁湛業をさす）は屢々里中に至って勸率したが、如何せん人々の心は1つにならず、振作は難しかった」⁷⁴⁾と記している。地方官の支援を欠いた安良約は道光25年(1845)の黄体正の死と共に求心力を失い、金田村の韋昌輝（太平天国北王）親子に代表される中小宗族の離反⁷⁵⁾によって瓦解したのである。

4. 太平天国前夜の広西における反乱と秘密結社

ここまで検討してきた前史を経て、太平天国前夜の広西は動乱の時代へと突入していった。『堂匪総録』はその様子を次のように記している。

広西は道光二十七年(1847)から土匪が次々と蜂起した。南[寧]、太[平]、泗[城]、鎮[安]四府は道路が不通になること十年に及んだ。弱肉強食[の世界]となり、流賊、土賊のみならず、団練もまた賊であり、住民も賊となった……。村人を脅し、亡命の徒を集め、要害の地に立てこもって抵抗した。少ない者で数十人、多い者は数百人、数千人となったのが土賊であった。初めは団練でも、ついには賊となり、表向きは団練だが、実のところは賊であった。官兵が強ければ従うが、官兵が弱く賊が跋扈すれば命令を聞かず、そのやり方が賊よりひどい者もいた。⁷⁶⁾

ここからは道光末年から広西全土が「弱肉強食」の世界となり、移民を主とする「流賊」や地元出身者から成る「土賊」など様々な反乱勢力が割拠したこと、とくに「盗匪」の取締りを目的として結成された団練が、自立性を強めて地方政府のコントロールが効かなくなり、結果として武断的な実力主義の風潮を助長してしまったことが窺われる。

また史料によるとこの時期の社会動乱は、まず統治力の比較的弱い広西西部の辺境地帯で「道路が不通」となる程に深刻化した。すでに道光16年(1836)に監察御史李紹昉は泗城府の西隆州について「最近広東の会匪が事件を起こして後、多くがここに潜伏して土悪と結託

し、党を結んで群をなして大貨手を名乗り、地元や旅行者に害をなしている」⁷⁷⁾と告発した。道光 18 年 (1838) にも雲貴総督伊里布が百色庁、泗城府で「添弟会」の活動が見られると上奏し、広西当局が調査を命じられた。だがこの時両広総督鄧廷楨らは「数十年来、四川、貴州などの貧民がここに来て墾殖しているが、皆山間に住み、それぞれ生業に安んじており……、実に大貨手はその中に隠れていなかった」「匪徒張五郎らが結盟拜会をしたという事実はなかった」⁷⁸⁾などと報じた。

ところが道光 27 年 (1847) になって、これらの報告は事実でなかったことが明らかになった。6 月に百色庁属の土上林県で土官黄金綬の衙門が襲撃され、土知県の印鑑が奪われたのである。また 7 月には土田州、帰徳土州でも土官の衙門が襲われた。

この事件の主謀者が大牛腸の綽名で知られる許四（別名許亜祥、桂平県人）であった。彼と蘇尚基、麥大歌は「積年の巨盗」で、この年 6 月に土上林県知県黄金綬と姻戚関係にある韋洸果、同じく黄金綬の親戚で元生員の黄元昭、黄元暢らと会い、黄金綬が若く経験不足で、その祖母が金持ちであるため掠奪を行う計画を立てた。彼らは 87 人を集め、武器を持って黄金綬の衙門に至った。たまたま黄金綬は外出中で、彼らは役所内へ入って印鑑や衣服などを奪った。

事件後に許四らは下旺地方が天然の要害で、官兵の搜索も困難であるため、ここを根拠地にして仲間を増やし、再び掠奪を行おうと考えた。彼らは土田州の衙門を襲うことに決め、7 月 22 日に 98 人で船に乗って土田州に至った。衙門に侵入した彼らは金品を奪い、質屋と雑貨店を掠奪した後、船に乗って下流へ進んだ。

2 日後に一行は帰徳土州に至ったが、許四は土知州の弟である黄為鏞が彼の仲間である温四を捕らえたことを思い出し、報復のために襲撃することにした。彼らは 60 名で衙門に至り、「黄為鏞は温四を捕らえるべきではなかった」と叫びながら、役所内の器物を破壊し、奪った衣服に火をつけた。そして彼らは再び船に乗って下旺の巢窟へ戻った。

3 つの土官衙門が襲撃されたことに驚いた清朝は、右江鎮総兵の達三らに数百名の兵勇を率いて下旺地方へ弾圧に向かわせた。許四らは武力で抵抗し、官兵 6 名を死傷させたが、官軍は蘇尚基を含む 83 名を殺害し、41 名を捕らえた。許四と麥大歌は隆安県へ逃れたところを捕らえられ、尋問の結果さらに道光 25 年 (1845) から隆安県、武縁県、都結土州、向武土州で強盗を繰り返していたことが明らかになった。

この事件は処罰された参加者が 181 人に及んだという事実だけを見ても、従来の「盗匪」とは活動の規模が違っていた。時の広西巡撫鄭祖琛は「土司は大半が若くして官位に就き、臆病で無能なため、日頃の取り締まりを全く行わず、匪徒たちは少しも恐れていない」⁷⁹⁾とあるように、辺境における治安悪化の原因を少数民族官吏である土官の統率力不足に求めた。だがそれが誤った認識であることはすぐに明らかになった。広西西部の流官統治区であった天保県における知県殺害事件がそれである。

道光 27 年 (1847) 末に帰順直隸州で「土賊」黄天宋ら 22 名が渠讓墟を襲撃し、翌年 4 月

に捜査を逃れて天保県へ入った。通報を受けた知県沈毓寅は「膂力があり、人となりも勇敢で、常に僅かな手勢を率いて馬に乗り、あちこちを捜査した」とあるように匪賊の取締りに熱心で、早速十数名の兵勇を率いて巴頭壩へ向けて出発した。夕暮れとなり、提灯をつけて前進していたところ、突然黄天宋らと遭遇して戦闘になった。沈毓寅は突撃を命じたが、兵勇2名が殺され、沈毓寅も喉元を斬られて死亡したという⁸⁰⁾。

この事件は政治的反乱を意図したものではなかったが、結果として地方官が殺害されるなど、清朝の辺境統治が揺らいでいることを示していた。また道光29年(1849)にも広西の「土司辺境」を捜索していた都司鄧宗珩が殺害され、南寧上思州では「土匪」彭亜富(広東防城人)が県城を襲撃し、奪った官印を返却する代わりに土官黄済に銀2,000両を要求する事件が発生した⁸¹⁾。

それでは広西東部の状況はどうであろうか。広西当局が全州に波及した湖南の雷再浩反乱への対応に追われていた道光27年(1847)12月に、平楽県に数百人の「匪徒」が集まっているとの情報が入った。彼らは平楽府城を攻撃し、委員張敬修の率いる官兵によって撃退されたが、別の一隊は陽朔県の白沙壩で掠奪を行った。広西巡撫鄭祖琛は増援の官兵300名を陽朔県へ急行させ、各地の団練に動員をかけた⁸²⁾。

この平楽反乱軍の首領は羅三鳳であったが、その仲間には後に太平天国の丞相として名を馳せる羅大綱(原名羅重旺または羅大、広東人)が混じっていた⁸³⁾。彼らは広西、広東、湖南、江西の出身で、平楽県一帯で山を耕したり、雇われ人や担ぎ屋となるか、職がなく他人の世話に頼って暮らしていた。道光27年(1847)11月に羅三鳳は廖漢庭、海九および荔浦県馬嶺街で染物屋を営んでいた羅大綱らと「異郷の暮らしは他人に騙され馬鹿にされるので、人を集めて結拜兄弟となり、何かあったら助け合おう」と話し合い、260人余りを集めて結拜儀礼を行った。その後廖漢庭らが各地で結拜を行い、仲間の人数が増えたのを見た羅三鳳は、天地会を名乗ることで「搶劫」しようと考えた。そこで新たに結拜儀礼を行い、羅三鳳、海九は総大哥となり、廖漢庭らが副大哥となった。

羅三鳳らの天地会が勢力を伸ばすと、これを聞きつけた平楽県知県陳時昌は会員の廖捷庭を捕らえた。羅三鳳は廖捷庭を救出しようと図り、平楽府の官兵が雷再浩反乱鎮圧のために全州へ動員されている隙について、府城を襲撃して脱獄させる計画を立てた。まず廖漢庭があらかじめ城内へ入って内応を図ったが捕らえられた。12月7日に羅三鳳は城攻め用の道具を持って平楽府城に迫ったが、官兵に撃退されて羅三鳳は捕らえられた。

いっぽう海九は陽朔県の白沙壩で村人に銭や米を供出させたり、生員蔣浩らの財産を奪った。また回り道をして陽朔県城を窺ったが、知県文滋盛の率いる官軍に敗北して馬嶺へ後退した。12月11日に海九軍は再び白沙壩へ攻撃したが、団練に敗れて海九は捕らえられた。さらに桂林から到着した増援の官兵が攻撃を開始すると、反乱軍は300名以上を殺されて四散した。その後反乱軍の残余は荔浦県、修仁県で「本処土匪」の彭士全、黃正美らを糾合して掠奪を繰り返したが、永安州境の山奥に追いつめられて殲滅された。戦闘で殺された反

乱軍参加者は237名、逮捕者は478名に及び、羅三鳳と海九は「初め結盟拜会し、次いで密かに反乱を企んだ」罪によって凌遲処死の刑となった⁸⁴⁾。

以上が羅三鳳反乱の顛末であるが、まず注目すべきは処罰された参加者の多さであった。それは広西東部においても反乱軍の活動が盛んであったことを物語る。また太平天国の蜂起後、広西巡撫鄭祖琛は反乱軍弾圧の手ぬるさを批判され、熱心な仏教徒だった彼が処刑を好まず、逮捕者の多くを保釈したために、地方官たちは盗賊の取締りを怠ったと告発された⁸⁵⁾。だが檔案史料を見る限り、鄭祖琛は反乱参加者に対して厳しい処罰を行っており、こうした批判は事実を誤認していたことがわかる。

この頃両広地方で長く幕僚を務めた俞鳳翰は、鄭祖琛の無策ぶりが反乱を助長したという見解は誤りだと述べたうえで、鄭祖琛本人は反乱平定の意志を持っていたが、周囲の反対や圧力を受けて鎮圧を進められなかったと述べている。

『粵寇起事記実』によると、道光29年(1849)に鄭祖琛に拝謁した俞鳳翰は、潯州から桂林一帯の反乱軍が「尋常の盗賊」とは異なり、すぐに朝廷に大軍の派遣を要請して弾圧すべきであると訴えた。だが広西布政使勞崇光は出兵要請に強硬に反対した。その実彼らは軍事費の増大を嫌っていた内閣大学士穆彰阿から、「決して賊が多いと上奏してはならぬ」という忠告を再三受けていた。さらに両広総督徐広縉が穆彰阿の意見に従ったため、鄭祖琛は「国を誤らせた凡臣」という汚名を引き受けざるを得なかったという⁸⁶⁾。

当時の広西の財政事情は、道光28年(1848)の「官墊民欠」即ち官が穴埋めした税の未納分が105,116両に上るほどに悪化し、中央の援助なくして反乱軍鎮圧の経費を賄える状態ではなかった⁸⁷⁾。反乱の拡大を前に、広西の地方官に残された選択肢は「招撫」つまり反乱軍の投降を受け入れ、これを他の反乱勢力の鎮圧に利用するという方法だった。その代表的な例が張嘉祥（後の江南提督張国樑）の投降である。

張嘉祥は広東高要県人で、初め貴県水源街の雑貨店に雇われたが、賭博に耽って店を追われて盗賊となった。道光26年(1846)に靈山県の蘇三、横州の謝剛殿、広東欽州の李士奎らと結んで広義堂を名乗った張嘉祥は、広西南部から広東廉州府一帯を中心に活動した。その後官軍に敗れて欽州の十万大山に潜伏した張嘉祥であったが、道光29年(1849)に勢いを取りもどし、横州の博合墟を根拠地として官軍を打ち破った。そしてこの年冬に張嘉祥の弾圧に手をやいた左江鎮総兵の盛筠らが、彼の投降を認めて隆安県の顔品瑤反乱軍を攻撃させたのである⁸⁸⁾。

この張嘉祥の招撫は大きな波紋を呼んだ。道光30年(1850)6月に清朝は「広西は昨年張嘉祥が事件を起こし、官兵が捕獲出来ずに無理に招いて投降させた結果、余党が四散してゲルになっている」⁸⁹⁾との認識を示し、巡撫鄭祖琛に反乱軍の徹底弾圧を命じた。また10月に兵科給事中の袁甲三は、張嘉祥の招撫以後「各府県も右に倣えとばかりに招撫の説を唱え、賊にワイロを贈って立ち去ることを求めるようになり、賊が益々増長することを考えず、弾圧経費を節約するつもりが却って支出を増大させている」⁹⁰⁾とあるように、下級官員

たちが真剣に反乱軍の鎮圧に取り組まなくなったと告発した。さらに 11 月に両広総督徐広縉は、張嘉祥の招撫後に人々は官を信頼せず、反乱軍に庇護を求めるようになったばかりか、地方官の中にも反乱軍に護衛を頼む者がいると非難した。そして「釀乱欺飾」の報告を行った鄭祖琛を即刻解任するように求めた⁹¹⁾。

実際のところ徐広縉は道光 30 年 (1850) 初めに広東「洋匪」である新安幫の張開平、陽江幫の張揚保らを招撫しており⁹²⁾、彼の鄭祖琛批判は自らの失点を隠すための保身に外ならなかった。だが広西当局の招撫政策が、各地の反乱勢力を勢いづけてしまったことも事実であった。こうした広西の状況について、戸部尚書羅惇衍（広東順徳県人）はこの年 10 月の上奏で次のように述べている。

この匪賊たちのグループは実に多く、蹂躪して殆ど省内全てに及ぶ。すでに統率もなければ巢穴もない。一つの場所に至るたび、文武の官員は噂を聞いて逃げてしまい、逃げ遅れた者は捕らえられて身代金を要求される。彼らは土地の金持ちや店舗をことごとく掠奪し、金品は仲間たちに分けあたえる。元々は農民だった者たちもみな農具を捨てて従い、分け前を求め、満足すると逃げ去る。村々は廢墟となり、省内の士民はみな被害に遭い、生計が立てられず、明日のことはわからないと嘆く。このため劫殺は益々多く、仲間はいよいよ増え、恐らくはすぐに肅清するのは難しい。⁹³⁾

反乱軍が勢力を拡大し、地方官は彼らを抑える術を失ってしまったこと、実力行使の風潮が広まる中で、それまで反乱軍に加わっていなかった者まで掠奪に加わり、多くの街や村がその被害に遭って社会秩序が崩壊していった様子がわかる。太平天国前夜に広西の人々が直面していたのは、まさにこうした無政府状態であった。

さて最後に我々が検討しておくべきもう 1 つの問題は、羅三鳳らが反乱に先だって天地会を名乗った理由である。すでに本稿が指摘したように、道光年間の広西では天地会の活動は厳しい弾圧によって蔭を潜めていた。だがアヘン戦争後の広東では、道光 24 年 (1844) に双刀会を組織して官兵と衝突した林大眉、黄悟空（広東潮陽県人）⁹⁴⁾、同年に隆興会を立てて掠奪を行った高名遠（広東香山県人）⁹⁵⁾、道光 29 年 (1849) に合勝堂を立てて広州攻撃の計画を立て、英徳県で都司や官兵を殺害した劉亜才、鄧南保⁹⁶⁾ など、「天地会の復興」を図った事例が幾つか見られた。

それでは何故再び天地会（三合会）が招き寄せられて来たのだろうか。両広総督徐広縉は道光 30 年 (1850) 初めの上奏で次のように述べている。

三合会はいつ始まったかはわからないが、これを紳士や長老に尋ねたところ、みな明の嘉靖年間にはその名があるとのことだった。それは祖先から子孫、父から子へと受けつがれ、銭を集めて人々を惑わし、智恵を装って愚かな者を騙す。まことに盛世には誅

すべく、国法の赦すまじき連中である。だが僅かな田を耕し、僅かな資本で商売を営む者で、犯人に報復されたり、言いがかりをつけられて襲撃されるのを心配して入会している者もあり、彼らはその実禍を避けているのである。⁹⁷⁾

ここからは社会の混乱に不安を抱く人々が天地会に庇護を求めたことがわかる。また興味深いのは清代康熙年間に成立した政治結社として語られることの多い天地会が、明代嘉靖年間には存在した由緒ある団体と認識され、「智慧を装って愚かな者を騙す」とあるように、乱世を乗り越える処方箋を持っているかのように受けとめられた点であった。

さらに注目すべきことは、従来天地会の影響力が圧倒的だった広西、広東において、この時期に民間宗教結社の影響力が及んだ事実であった。具体的な活動が見られたのは青蓮教で、鄧依真（四川南部県人）は道光 24 年 (1844) に徐万倡、張有林と共に桂林に至り、眼科医や算命先生をしながら布教した。だが省都である桂林は警戒が厳しかったため、彼らは陽朔県に移り、「無生老母が降乩して仙仏を転生させた」「教えを信じて喫齋すれば、水火の災劫を免れることが出来る」⁹⁸⁾と説いて数名の信者を獲得した。また広東でも道光 27 年 (1847) に金丹教徒の董言台（江西南康県人で贛州に移住していた）が布教を行い、花県、南海県、番禺県、曲江県で 20 名余りを入信させたという⁹⁹⁾。

これらの事実から見る限り、太平天国前夜の広西、広東における天地会の再流行や宗教結社の活動は、「盗匪」の掠奪行為に代表される際限のない武力行使に疲れ果てた人々が、天地会の「反清復明」のスローガンや青蓮教などの説く宗教的世界観に混乱を収拾し得る新たな社会のヴィジョンを見出そうとした結果であったと考えられる。

しかし天地会はこれら人々の切実な要求に応えることは出来なかった。元々天地会は下層移民の相互扶助にその本質があり、新たな世界像を提示するものではなかったからである。この時期の広西における天地会の主張やその組織を見ると、張嘉祥は「劫富救貧」の旗を掲げ¹⁰⁰⁾、武宣県を中心に活動した陳亜貴は「順天行道」を唱えた¹⁰¹⁾。また広西省境で捕らえた天地会員に対する尋問を行った貴州巡撫喬用遷は、反乱軍が様々な「堂名」を持ち、広東出身者の「広馬」と広西人の「土馬」に分かれていること、その組織には大頭目、小頭目の区別があり、内部で様々な暗号が用いられていることを指摘した¹⁰²⁾。

さらに劉亜才らの合勝堂反乱軍の場合「天地元黄宇宙洪荒日月盈」の 11 字から 1 字を取って 11 の小部隊を作り、総頭目、次頭目の下に軍師や先鋒を置いたが、その政治的主張は極めて曖昧であった¹⁰³⁾。つまり再興された天地会は政府の弾圧や定住者の眼差しによって生み出された秘密結社としての「作られた伝統」を乗り越えることが出来なかった。青蓮教などの民間宗教も多くの信者を獲得するには至らず、人々は伝統中国の文化的な枠組みを揺り動かすような新たな啓示を待ち望んでいたのである。

小 結

本稿は太平天国前夜の広西における社会動乱の発生過程について、下層移民と天地会系結社の動向に注目しながら考察した。その結果広西入植後も安定した生活基盤を確立出来なかった下層移民は、相互扶助を目的とする結拜兄弟の儀礼を盛んに行った。それはやがて天地会という形を取り、移民か広西の地元出身者かを問わず急速に広まった。

天地会の参加者は下層民だけでなく、一定の経済的基盤を持ちながら、移民社会の中で政治的リーダーシップを握れなかった人々を含んでいた。ただし初期の天地会には政治性は希薄であった。むしろ「反清復明」のスローガンに見られる反体制的な秘密結社というイメージは、結拜兄弟が持つ反秩序性を警戒して弾圧を繰り返した清朝政府と、天地会を異端の政治勢力と見なした地域社会の共犯関係によって作られた伝統であった。

続いて本稿は 19 世紀前半の広西で天地会と並んで社会問題となった「盗匪」の活動について分析した。その参加者はやはり下層民であり、広東出身者の中には船の襲撃やアヘン取締りを装った略奪行為など、故郷で盛んに行われていた犯罪行為のノウハウを持ちこむ者もいた。だがこれら「盗匪」と天地会の関係は希薄であり、強盗事件の増加は清朝政府の厳しい弾圧によって天地会の活動が低調となり、結拜兄弟の相互扶助的機能によって危機を回避出来なくなった下層民が直接的な実力行使に訴えた結果であった。19 世紀前半の中国では既存の民間宗教や秘密結社が弾圧を受ける中で、むしろそれらの行動様式を受けつがず、理念を欠いた異議申し立てが主流となっていたことを指摘した。

太平天国につながる「動乱の時代」はこうした社会矛盾が生み出した結果であった。むしろ清朝政府も治安の維持に無関心だった訳ではなかったが、反乱軍の活動は地方政府の鎮圧可能な規模を超えて拡大し、これを取り締まるために設けられた保甲、郷約組織や団練も機能不全に陥るか、武断的な風潮を助長する結果をもたらした。さらに軍事費の支出増加を嫌う中央の意向をくんだ地方官が反乱軍に対する招撫政策を実施すると、政府の威厳は地に落ちて無政府状態に陥った。こうした混乱の中で、際限なき武力行使に疲れ切った人々の間には、天地会の「政治」的言説や青蓮教の説く宗教的世界観に希望を托そうとする動きも現れた。だが元々下層移民の相互扶助にその本質があった天地会に、新たな社会のヴィジョンを提示することは出来なかったのである。

このように考えると、洪秀全らによる上帝教の布教は、動乱の中で救済を求める人々の願いに応えるものだったことがわかる。むしろ 1844 年に広西貴県の親戚である王盛均を訪ねた洪秀全一行は、本稿が取り扱った人々の多くがそうであったように行商の利益によって生活を支え、同郷のネットワークを活用する移民の一例に過ぎなかった。また治安の悪化や地方官の無気力ぶりは洪秀全自身も体験するところとなり、広西への旅の途上に追い剥ぎに遭った洪秀全の訴えを肇慶府の役人たちは取りあおうとしなかった。だがこうして苦境に陥った洪秀全を救ったのは、乗り合わせた船の客たちが見せた相互扶助の精神だった¹⁰⁴⁾。つまり洪秀全は結拜兄弟や天地会に庇護を求めた下層移民の世界をよく知っていた知識人――

あるいはこうした下層移民そのもの——であった。

しかし洪秀全を他の移民たちと異ならしめたのは、キリスト教と儒教的な大同ユートピアが渾然一体となった上帝教の存在にあった。それはヨーロッパ文化との接点があるが故に、中国の秘密結社がかかえていた「作られた伝統」の枠組みに囚われない新しさを持っていた。またそれは「公」を重んじ、私心を排する大同思想の影響によって、来るべき未来について比較的明確なヴィジョンを持っていた。さらに上帝教は旧約聖書（ユダヤ・キリスト教）の伝統である「非寛容」と『勸世良言』の主張する偶像崇拜批判、あるいは洪秀全自身と彼を指導したロバーツのパーソナリティによって、既存の宗教に対する激しい攻撃性を帯びていた。こうした上帝教の特質こそは「被害に遭い、生計が立てられず、明日のことはわからないと嘆」いていた人々に一筋の希望を与えたのである。

このようにして成立した上帝会がどのように発展し、みずからの宗教王国をめざして蜂起を試みたかについては、別の機会に詳述することにした。

註

- 1) 太平天国史研究が現代中国の政治変動と密接に関わり、今なお無関係でない事実については小島晋治『太平天国と現代中国』（研文出版、1992年）に詳しい。また最近では太平天国を法輪功など現代中国の政治問題と結びつけ、「邪教（カルト宗教）」として否定する傾向も見られる。こうした政治主義的な見方を批判しつつ、太平天国の宗教という未解明の課題に取り組んだ労作として夏春濤『天国の隕落——太平天国宗教再研究』（中国人民大学出版社、2006年）がある。
- 2) 菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【本文編】【史料編】風響社、1998年。
- 3) 菊池秀明「太平天国前夜の広西における社会変容——台湾故宫博物院所蔵の檔案史料を中心とした分析——」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』32号、2006年。
- 4) 例えば太平天国革命時期広西農民起義資料編輯組編『太平天国革命時期広西農民起義史料』中華書局、1978年、陳周棠主編『広東地区太平天国史料選編』広東人民出版社、1986年は多くが地方志と実録の記載、口述資料などによって構成されている。
- 5) 中国人民大学清史研究所、中国第一歴史檔案館合編『天地会』7、中国人民大学出版社、1988年。庾裕良、陳仁華等編『広西会党資料匯編』広西人民出版社、1989年。中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、光明日報出版社、1992年。
- 6) 蘇成額奏、道光八年三月二十一日、軍機檔 59789号、台湾国立故宫博物院蔵。
- 7) 民国『桂平県志』巻29、食貨中、民業。
- 8) 恩長奏、嘉慶十三年正月二十四日『宮中檔嘉慶朝奏摺』第17輯、425頁、台湾故宫博物院蔵。
- 9) 恩長奏、嘉慶十三年十月初四日『宮中檔嘉慶朝奏摺』第21輯、367頁。
- 10) 慶保奏、嘉慶二十一年五月初六日『粵撫奏稿』巻10、東洋文庫蔵。
- 11) 祁埏奏、道光十三年九月初六日、軍機檔 65679号。
- 12) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補本、中国社会科学出版社、1995年、143頁。
- 13) 桂皮については民国『桂平県志』巻19、物産に記載があり、清代中期には「紫荆桂」が有名であったが、やがて乱獲により産出高が減少したと述べる。また広東信宜県の上帝会首領となった凌十八（原籍広東平遠県）らは、藍栽培のために平南県鵬化山へ出稼ぎに行った（『抄呈信宜懷

郷司巡檢陳榮親呈凌十八始末緣由各件」、佐佐木正哉編『清末の秘密結社』近代中国研究委員会、1967年、183頁。徐広縉等奏、咸豐二年六月二十二日、中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』第1冊、光明日報出版社、1992年、406頁。さらに東王楊秀清（広東嘉応州人）は紫荆山鵬隘山で「貧甚、以焼炭為生」であった（民国『桂平県志』巻41、列伝）。貴州龍山には銀鉞山があり、ここへ出稼ぎに来た頼九（陸川県陸茵村人）は鍛冶職人であったと言われる（鍾文典『太平天国開国史』広西人民出版社、1992年、108頁）。なお南丹土州は広西有数の銀、錫鉞山で、1815年に150名余りが死亡する落盤事故を起こした。この事件を報じた広西巡撫慶保は「所有在廠工丁、俱係本省及隣近各省覓食貧民」と述べている（慶保奏、嘉慶二十年十月二十四日『粵撫奏稿』巻5）。

- 14) 尹佩榮奏、道光二年十二月初七日『宮中檔道光朝奏摺』第1輯、394頁。
- 15) 嵩溥奏、道光七年八月二十四日、軍機檔 56879号。なおこの上奏によれば、移民の世帯数は13,190戸、小作地の数は田が20,051畝、畑が20,087塊という。
- 16) 菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【本文編】、第5章、297頁。
- 17) 袁守侗奏、乾隆二十九年二月二十七日『宮中檔乾隆朝奏摺』第20輯、687頁によると、広西は華南9省の「軍流」と全国の「烟瘴充軍」となった罪人を受け入れていたが、「毎年解到人犯更多、統計現在每府多則二、三百名、最少亦百餘名。此等軍遣類皆狡黠兇横、雖現飭各州縣嚴加約束、但積聚日多、恐易滋生事端」とあるように人数が増加したため、少数民族地区である泗城、鎮安2府を新たに流刑地に加えるように求めた。また1753年には死刑囚の胡正乾（湖南寧郷県人）が脱獄し、広西南丹土州の鉞山に潜伏する事件が起きた。署理湖南巡撫范時綬は「各礦廠爐戸以及開石挑沙各項人夫、動輒數千、無分土著外来、凡有無業窮民、俱得赴廠趁覓食、既不便阻其生計、又慮難以稽防」とあるように、鉞山における下層民の流入が治安維持の観点から難しい問題ををはらんでいたと報じている（范時綬奏、乾隆十八年十一月十二日、同上書第6輯、719頁）。
- 18) 恩長奏、嘉慶十三年正月二十四日・十月初四日『宮中檔嘉慶朝奏摺』第17輯、425頁・第21輯、367頁。
- 19) 呉虎炳奏、乾隆四十二年十月初八日『宮中檔乾隆朝奏摺』第40輯、337頁。
- 20) 恩長奏、嘉慶十三年五月二十一日『宮中檔嘉慶朝奏摺』第19輯、141頁。
- 21) 呉虎炳奏、乾隆四十二年十月初八日『宮中檔乾隆朝奏摺』第40輯、337頁。
- 22) 恩長奏、嘉慶十三年五月二十一日『宮中檔嘉慶朝奏摺』第19輯、141頁。
- 23) 嵩溥奏、道光七年八月二十四日、軍機檔 56875号。
- 24) 孫永清奏、乾隆五十三年六月二十八日『宮中檔乾隆朝奏摺』第69輯、89頁。
- 25) 孫江『近代中国の革命と秘密結社』汲古書院、2007年、78頁以下によると、清朝の法律では「異姓結拜」は厳禁され、乾隆年間以後には長幼の序によらず、40人以上を集めたケースなどについて量刑が科されるようになった。なお牙籤会の事件では主犯の仇徳広は入れ墨のうえ斬首となった（孫永清奏、乾隆五十三年六月二十八日『宮中檔乾隆朝奏摺』第69輯、89頁）。
- 26) 阮元奏、道光元年二月初一日『宮中檔道光朝奏摺』第1輯、21頁。
- 27) 恩長奏、嘉慶十二年四月十五日『天地会』7、184頁。
- 28) 「抄録蔣宏慈等四月内呈撫藩各衙門粘單」『天地会』7、375頁。
- 29) 菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【本文編】、第6章。
- 30) 巴哈布奏、嘉慶二十二年五月十四日批『天地会』7、368頁。
- 31) 趙金龍は江華県錦田郷の過山ヤオで、牛や穀物の強奪事件をめぐり対立関係にあった天地会員鄧

- 潮相らへの報復を契機に蜂起した（周存義『平定瑶匪述略』。魏源『聖武記』巻七、道光湖廣平定瑶）。なおこの反乱については瑶族簡史編写組『瑶族簡史』広西民族出版社、1983年、62頁、呉永章『瑶族史』四川民族出版社、1993年、607頁を参照のこと。
- 32) 文孚奏、嘉慶二十四年四月初六日『広西会党資料匯編』143頁。
- 33) 光緒『鬱林州志』巻12、選挙。鬱林州の黎姓は明代に3名の生員を生み、清代には黎開紀（康熙年間生員）、黎秀峰（乾隆年間武舉人、下山村人）、黎倬銘（光緒年間生員、岑地坡村人）が出た。彼らと黎開紹兄弟との系譜関係は不明である。
- 34) 光緒『鬱林州志』巻12、選挙。順治年間から道光年間までの挙人以上の合格者は、南門口陳氏が17例、高山村牟氏が8例、州背村・江岸村蘇氏が8例、州背村・雲石村楊氏が6例、新村文氏が4例、福綿村唐氏が4例であった。
- 35) 梁獻林「重修紫泉書院記」道光十二年（光緒『鬱林州志』巻20、藝文）。
- 36) 花杰「重修鬱林州城垣記」道光十六年、蘇宗経「紫泉書院新增學租碑記」道光十年（共に光緒『鬱林州志』巻20、藝文）。
- 37) 鬱林『蘇氏族譜』巻1、広西通志館蔵。この蘇氏は原籍広東順徳県で、明初に官僚移民として広西へ入植したとの伝説を持つ。蘇宗経は15代で、16代の蘇展霖（道光年間挙人）は咸豊年間に団練を率いて容県の反乱軍平定に尽力した功績を認められ、梧州府教授などを歴任した。
- 38) 恵吉奏、道光十六年二月十七日、軍機檔 70448号。
- 39) 卿祖培奏、嘉慶二十五年七月十四日および附件「蔣彩玉致卿祖培書信」『天地会』7、372, 374頁。「抄録蔣宏慈等四月内呈撫藩各衙門粘單」。
- 40) 民国『灌陽県志』巻首、原序、清道光甲辰重修県志銜名。また民国『広西通志稿』巻17、民族、灌陽県によると、県内の蔣姓は①開德里蔣氏（明初に江蘇常熟から移住、民国期の人口1,500人）、②立安村蔣氏（明中期に四川涪州から移住、人口1,000人）、③巨岩村蔣氏（宋末に江西吉安から移住、人口1,300人）、④伍家湾蔣氏（元末に広西全州から移住、人口364人）、⑤達溪村蔣氏（宋末に江南から移住）、⑥同徳・長渡村蔣氏（明初に全州から移住、人口1,400人）、⑦車頭村蔣氏（明初に江南から移住、人口1,700人）、⑧興秀村蔣氏（明初に山東高唐州から移住、人口3,000人）に分かれ、多くの科挙合格者（明代に挙人18名、清代10名）を生んだ。また蔣姓に次ぐ勢いを持つのが唐姓（明代に7名、清代20名）で、清末の台湾巡撫となった唐景崧（ただし桂林文昌門外に移住）はこの族人であった（『広西郷試硃卷』唐景崧、共に広西桂林図書館蔵）。
- 41) 卿祖培の上奏を受けた清朝は両広総督阮元に調査を命じ、阮元は自ら灌陽県を訪れて黄牛市などを調査した（阮元奏、嘉慶二十五年九月二十二日批『天地会』7、381頁）。また民国『灌陽県志』巻23、事紀によると「阮元帶兵進剿、住筍龍川書院、擒渠魁而殲之、邑中賴以安」という。
- 42) 秦宝琦『清前期天地会研究』中国人民大学出版社、1988年、215頁。山田賢『中国の秘密結社』講談社、1998年、106頁。また孫江『近代中国の革命と秘密結社』は、天地会に限らず日本の中国秘密結社史研究の多くが「革命」の枠組みのなかで秘密結社を捉えたために、秘密結社の実像からかけ離れたものになってしまったと指摘している（52頁）。
- 43) 成林奏、嘉慶十七年五月初八日批・十一月初二日批および附件「尹之屏所編天地会歌訣」『天地会』7、333, 346, 350頁。
- 44) 成林奏、嘉慶十七年二月初一日批『天地会』7、328頁。百齡奏、嘉慶九年五月初十日批、同161頁。
- 45) 梁章鉅奏、道光十八年七月二十九日『宮中檔道光朝奏摺』第4輯、721頁。鄧廷楨等奏、道光

十八年九月二十六日、軍機処奏摺録副、秘密結社項 8895-43 号、中国第一歴史檔案館蔵。

- 46) 周之琦奏、道光二十五年十一月二十六日『宮中檔道光朝奏摺』第 16 輯、267 頁。
- 47) T. ハンバーク『洪秀全の幻想』青木富太郎訳、生活社、1941 年、139 頁。
- 48) 光緒『貴県志』巻 6、紀事寇畧、盜賊始末。
- 49) 恩長奏、嘉慶十四年六月十八日『宮中檔嘉慶朝奏摺』第 25 輯、120 頁。
- 50) 『宣宗実録』巻 12、道光元年正月壬戌の条。
- 51) 鄭祖琛奏、道光二十八年三月二十五日、軍機檔 81940 号およびその附件、同 81941 号。
- 52) 祁埏奏、道光十三年四月二十一日、軍機檔 63348 号。
- 53) 鄭祖琛奏、道光二十七年八月二十九日・道光二十八年三月二十五日、軍機檔 79119 号・81941 号（共に附件「広西省統獲積年劫搶竊逸犯清單」「広西省統獲積年劫搶逸犯案由罪名清單」）。
- 54) 例えば道光 24 年 (1844) には①東莞県で彭豆皮らの渡船強奪事件（耆英等奏、道光二十五年二月二十八日、軍機檔 73452 号）、②順徳県で梁亜勝らの官船襲撃事件（同奏、道光二十五年三月二十六日、同 73885 号）が「夥衆 40 人以上」の規模で発生した。また翌 25 年 (1845) には③香山県で梁亜七らの巡檢拉致事件（同奏、道光二十五年六月初八日、同 74779 号）、26 年 (1846) には④新寧県で何亜容らの當舖襲撃事件（同奏、道光二十七年八月二十四日、同 79054 号）、27 年 (1847) には⑤南海県で郭亜合らの渡船襲撃事件（同奏、道光二十七年七月二十九日、同 78733 号）、⑥香山県で蕭亜連らの強盜殺人事件（同奏、道光二十七年八月二十四日、同 79055 号）が 40 人以上の規模をもつ事件として報告されている。なお地方官を装って掠奪を働いた事例としては、道光 24 年 (1844) に番禺県で石鵬飛（アヘン戦争期に六品軍功を与えられた元水勇）が「奉憲緝私」の官船を偽って掠奪を働いた例がある（同奏、道光二十五年正月二十八日、軍機檔 73107 号）。
- 55) 蘇成額奏、道光八年四月二十日、軍機檔 60086 号附件に「李栢青聽從結拜天地會」とある。
- 56) 惠吉奏、道光十三年四月二十一日、軍機檔 63353 号附件に「易家謀聽從結拜弟兄二次、又聽從訛詐得財一次」「事犯在道光十一年正月十二日恩旨以前、到官在後」とある。
- 57) 惠吉奏、道光十四年四月二十日、軍機檔 68066 号附件に「農普添即農餘九、聽從結拜弟兄三次」「羅米粉七聽從結拜弟兄一次」「黃士繞即黃士儁、聽從結拜弟兄二次」「該犯事犯在道光十一年正月十二日恩旨以前、到官在後」とある。
- 58) 菊池秀明「太平天国前夜の台湾における反乱と社会変容——道光十二年の張丙の乱と分類械闘を中心に」塚田誠之編『中国における諸民族の移動と文化の動態』風響社、2003 年、195 頁。
- 59) 捻子については並木頼壽「清末皖北における捻子について」『東洋学報』59 巻 3・4 号、1978 年。郭豫明『捻軍史』上海人民出版社、2001 年。
- 60) 周之琦奏、道光二十一年十一月十五日『宮中檔道光朝奏摺』第 9 輯、184 頁。
- 61) 周之琦奏、道光二十一年九月二十二日『宮中檔道光朝奏摺』第 8 輯、553 頁。
- 62) 周之琦奏、道光二十一年十月十七日『宮中檔道光朝奏摺』第 8 輯、759 頁。
- 63) 周之琦奏、道光二十二年二月十二日『宮中檔道光朝奏摺』第 10 輯、249 頁。
- 64) 『宣宗実録』巻 52、道光三年五月辛巳の条。
- 65) 周之琦奏、道光二十二年九月二十八日『宮中檔道光朝奏摺』第 10 輯、249 頁。
- 66) 『堂匪総録』巻 9。
- 67) 『宣宗実録』巻 12、道光元年正月壬戌の条。また『郷約条規』は『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、18 頁。
- 68) 西川喜久子「広西社会と農民の存在形態——19 世紀前半における」『講座中国近現代史 1 中国

- 革命の起点』東京大学出版会、1978年、137頁。
- 69) 稲田清一「太平天国前夜の客民について——広西省桂平県における郷約、保甲制再編を素材として」『名古屋大学東洋史研究報告』11、1986年。
- 70) 寺田浩明「明清法秩序における『約』の性格」『アジアから考える4 社会と国家』東京大学出版会、1994年、10頁。
- 71) 菊池秀明「太平天国期の広西における宗族と地域社会」『歴史学研究』686号、1996年、1頁。
- 72) 周之琦奏、道光二十五年三月二十八日、軍機檔 73788号。
- 73) 民国『桂平県志』巻21、紀政、職官によると、袁湛業は山東長山県人、「嚴於治盜」で、自ら麻洞の盜賊を鎮圧した。黄体正の編纂した道光『桂平県志』は彼を「賅要」と称えている。
- 74) 黄体正「里中紀事八首」『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、41頁。
- 75) 菊池秀明「太平天国期の広西における宗族と地域社会」。また鍾文典『太平天国人物』韋昌輝、広西人民出版社、1978年、196頁。
- 76) 『堂匪総録』巻1。
- 77) 李紹昉奏、道光十六年五月十八日、軍機檔 71132号。
- 78) 鄧廷楨奏、道光十六年十一月十七日、軍機處奏摺録副、秘密結社項 8895-45号。梁章鉅奏、道光十八年閏四月二十日『宮中檔道光朝奏摺』第4輯、139頁。
- 79) 鄭祖琛奏、道光二十七年八月二十五日『宮中檔道光朝奏摺』第20輯、283頁。同奏、道光二十八年正月二十五日、軍機檔 81181号。
- 80) 鄭祖琛奏、道光二十八年四月初十日、軍機檔 82134号。
- 81) 『宣宗實録』巻471、道光二十九年八月己丑の条。民国『思樂県志』巻8。なおこの時都司鄧宗珩らを殺害したのは後述の張嘉祥反乱軍であった（『平桂紀略』巻1）。
- 82) 鄭祖琛奏、道光二十七年十一月初八日、軍機檔 80108号。なお駱秉章奏、咸豐五年九月十二日『駱文忠公奏稿』巻三によれば、この時期胡有禄、胡有福兄弟が羅大綱と共に陽朔県城攻撃に参加しており、咸豐4年(1854)に胡有禄と朱洪英が湖南で昇平天国を建て、江南の太平天国に呼応する伏線となったという。また陸宝千『論晚清兩広の天地会政權』（中央研究院近代史研究所、1975年）を参照のこと。
- 83) 民国『荔浦県志』巻3。また鍾文典『太平天国人物』羅大綱、419頁。
- 84) 鄭祖琛奏、道光二十八年三月二十八日、軍機檔 81998号。
- 85) 明心道人「髮逆初記」中国近代史資料叢刊『太平天国』4、神州国光社、1952年、453頁。
- 86) 俞鳳翰「粵寇起事記実」太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』第1冊、中華書局、1961年、10頁。
- 87) 『宣宗實録』巻453、道光二十八年三月乙亥の条。
- 88) 張嘉祥については光緒『貴県志』巻6、紀事寇畧、盜賊始末。民国『横県志』巻5。民国『邕寧県志』巻34。
- 89) 軍機大臣、道光三十年五月初六日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、1頁。
- 90) 袁甲三奏、道光三十年九月初八日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、45頁。
- 91) 徐広縉奏、道光三十年十月初二日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、67頁。
- 92) 徐広縉「奏陳搜捕洋匪沿海洋面肅清疏」「密陳収撫投誠各首民分別遣留稽籌生計片」『鹿邑徐制軍（広縉）奏疏遺集』巻3、東洋文庫蔵。
- 93) 羅惇衍奏、道光三十年九月十三日『羅文恪公遺集』巻上。
- 94) 耆英等奏、道光二十五年二月二十八日・四月二十八日、軍機檔 73446号・74323号。

- 95) 耆英等奏、道光二十五年九月二十八日、軍機檔 76028 号。
- 96) 徐広縉等、道光二十九年三月二十五日・四月初十日、軍機処奏摺録副、農民運動類、反清項 8895-36 号・8895-47 号、中国第一歴史檔案館蔵。
- 97) 徐広縉「奏陳三合会匪實在情形片」『鹿邑徐制軍（広縉）奏疏遺集』巻 3。
- 98) 周之琦奏、道光二十五年四月二十八日・十月二十五日『宮中檔道光朝奏摺』第 14 輯、281 頁・第 15 輯、844 頁。
- 99) 耆英等奏、道光二十八年正月十七日、軍機檔 81813 号。
- 100) 民国『横県志』巻 5。民国『邕寧県志』巻 34。
- 101) 「広西慶遠府生員莫子升等呈文」『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、36 頁。
- 102) 喬用遷奏、道光三十年十二月二十四日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、138 頁。
- 103) 徐広縉等、道光二十九年三月二十五日、軍機処奏摺録副、農民運動類、反清項 8895-36 号。
- 104) T. ハンバーグ『洪秀全の幻想』66, 69, 82 頁。また洪仁玕『太平天日』（西順藏編『原典中国近代思想史』1、岩波書店、1976 年、166 頁）。なお洪秀全の投宿先となった賜穀村の王盛均は史料中では「黄盛均」となっている。また貴県における移住の情況については菊池秀明「太平天国前夜の広西における移住と民族——貴県の場合」（神奈川大学中国語学科編『中国民衆史への視座』東方書店、1998 年、83 頁）を参照のこと。